Prototype material

Attention
本書は、カーニバル・ファンタズム 3rd Season. スペシャル映像ディスクの内容を
全てご覧になったあとで お読みになられることをお勧めします。

Prototype material

Prototype material

TYPE-MOON

Prototype material

Prototype material

Contents

Fate/Prototype synopsis	04
沙条綾香	30
セイバー	32
玲瓏館美沙夜	34
ランサー	36
アーチャー	38
ライダー	40
サンクレイド・ファーン	42
沙条愛歌	44
その他	46
令呪設定	50
背景設定	52
アニメ設定	60
後書き・奥付	66

◆

死者は蘇らない。
なくした物は戻らない。
いかなる奇跡と言えど、
変革できるものは今を生きるものに限られる。

末世に今一度（いまひとたび）の救済を。
聖都の再現。
王国の受理。
徒波（あだなみ）の彼方より、七つの首、十の王冠が顕れる。
罪深きもの。
汝の名は敵対者。
そのあらましは強欲。
その言祝ぎは冒涜となって吹きすさぶ。

遍く奇跡を礎に。
此処に逆説を以て、失われた主の愛を証明せん。

◆

■シーン0／天の崩落（前）

場面は副都心・地下鉄構内
（※OP用に編集したシーン。物語上では中盤ラストに相当）

都心地下鉄、午前零時。無人のプラットホーム。上り、下りのホームにそれぞれ立つセイバーとアーチャー。両者とも私服。人のいない構内は神殿のようにも見える。
セイバーは綾香の治療のため、一日中バーサーカーのマスターを捜していた。顔にはやや疲れと焦り。
そんな中、同じサーヴァントの気配を感知したセイバー。誘われていると承知しながら地下鉄のホームに向かうと、そこには二度剣を交えた強敵・アーチャーが不敵な笑みで待ちかまえていた。

：アーチャー
「久しぶりだな聖剣使い。こうして会うのは七日ぶりか？」
「なんだ、その生気のない顔は。笑え。我と出逢ったのだ、晴れやかに笑え。死地を楽しめぬ者に、勝利の女神は微笑まんぞ？
そう――たとえ己がマスターの命があと一日だとしても、我の好敵手なら笑うがよい。そうでなくては、蹂躙のしがいがない」
余裕綽々のアーチャー。セイバーは口を堅く閉じている。

：アーチャー
「つまらん。春の如く涼やかな男だと思ったがな。せっかくの色男が台無しだぞセイバー？」

：セイバー
「……台無しなのはお互い様だアーチャー。
君こそ、その軽口は改めた方がいい。品が無いにも程がある」
セイバーの切り返しに、アーチャー、愉快そうに笑う。
：アーチャー
「そう言うな。饒舌、無駄好きは悪癖だと、我もつねづね思っている。だが、その悪癖も馬鹿にできんかもしれんぞ？」
アーチャー、なにやらガラス瓶を持ち出す。
：アーチャー
「我の宝物庫には無駄が多くてな。アヤカをむしばむ毒血がいかなものかは知らんが、これこの通り、この世のあらゆる毒を癒す薬もある」
セイバーの目に光がもどる。
睨むセイバーと、ニヤリ顔のアーチャー。
：アーチャー
「我のマスターは実に面白味のない男だ。セイバー組はこのまま自滅する。マスターが毒に倒れるまで静観しろ、などと言うのだが……」
「まったくもって度し難い。あの男は慎重になるあまり、あらゆる馳走を見逃すタイプよな。勝利は重要だ。だが、時に憎たらしい好敵手は黄金より貴重である。心底から殺し尽くしたい相手など、一生に一人いるかどうか。そう思わんか、セイバー？」
両者、無言。
：セイバー
「――つまり？」
：アーチャー
「欲しければ、奪うがよい」
アーチャーの尊大な挑発。張りつめる空気。
通過電車が通り過ぎる。列車が通り過ぎた後、両者、共に武装している。
ガラス瓶をセイバーに放り投げるアーチャー。
ホームとホームの間、レールの上に舞うガラス瓶。
セイバー、ガラス瓶をキャッチするために飛び出し、アーチャー、凶悪な笑い顔でセイバーを斬り伏せようと飛び出す。
交差する二人。戦闘開始。

■S01／運命前夜。朝の目覚め～綾香。
：綾香（モノローグ 以下M）
「私の死刑宣告のリミットは、ついに、ゼロになった」
ヒロイン・綾香の私室。朝の光に目が覚める綾香。
綾香、気だるい目覚め。暗い顔つきでメガネをかけてベッドから出る。カメラ、壁のカレンダーへ。カレンダーには一日ずつ〆印が刻まれている。今日の日付に（不吉、死を暗示させる）×マークが入っている。
綾香、食卓へ。一人きりの朝食。テーブルには三人分の椅子（父

と姉）があるが、空席。

：綾香（M）
「何事もなく一日は始まる。
今日も街は穏やかで、わたしは平和だ。
わたしにとってもう日常になった〝何でもない日〟。昔、お父さんが生きていた頃では考えられない、普通の生活。楽しいかどうかと訊かれたら、間違いなく、楽ではあると答えるだろう」

そんなモノローグをこぼしながら朝食をすませ、屋敷の離れにあるガーデンへ。
ガーデンは黒魔術（ウィッチクラフト）の触媒に満ちている。薬草、霊草の他、生け贄用の鳩、使役用の鴉を大量に飼っている。
年季の入った作業台で、淡々と魔術儀式を行う綾香。
綾香自身、何の目的も理想もない。父が生きていた頃、父に逆らえなくて続けていたもの。ただ習慣になっているだけ。
綾香、ガーデンに住み着いた鳩の中から一羽、無造作に取り出す。鳩、ククッ？と綾香をつぶらな目で見る。
綾香、ためらってから鉈を振り上げる。鳥が羽ばたく音。
暗転。鮮血。

■S02／墓前
登校シーン。ひとりで通学する綾香。表情は憂鬱に。

：綾香（M）
「自己評価ではあるが、わたしの性格は最悪だ」
「根暗で、臆病で、視野が狭くて、見栄っ張り」
「そして何より――――」

カメラ、綾香の左手の薬指にズーム。包帯のあと。
画面は二十分前のガーデンに戻る。振り上げられた鉈。首をかしげる鳩。鉈は振り下ろされるものの、鳩の真横に落ちる。
綾香、過去のトラウマから生き物を殺すのは苦手になっている。
（そのせいで簡単な、出来合の材料を使った料理しかできない）
こうして沙条家の鳩は増えていく。

：綾香（M）
「どうしようもないぐらい、平凡で、平凡だ」
「今朝も父さんの言いつけを守れず、仕方なく自分の血で代用する始末」
「っていうか。そもそもわたし、魔術とか好きじゃないし」
場面、綾香の学校風景から放課後へ。
友達の少ない綾香に、数少ない友人が話しかけてくる。

：綾香

「ごめんなさい。今日は用があるので、失礼します」
：友人（ラ）
「？　なに、沙条さん、部活やってないと思ったけど？」
：綾香
「墓参りに。父と姉の命日なので」
綾香、隣町まで電車で移動。教会の外人墓地へ。
父の墓の前、冷めた表情……に見えて、怒り、憤りを秘めている……花を添える綾香。
帰ろうと踵を返すと、見知らぬ外人が立っている。
サンクレイド・ファーンである。
：サンクレイド
「こんにちは、サジョウさん」
見知らぬ外国人に名前を呼ばれてきょどる綾香。
：綾香
「どなたですか。外国の方に、知り合いはいません」
：サンクレイド
「ワタシも、日本人に知り合いはおりません。でも、アナタとはこれから、とても仲良くしたい。とてもとても。それは念入りに、針で縫い物をするように、丁寧に。
アナタたちは、アレに指をかけた、唯一の魔術師なのデスカラ」
綾香、顔面蒼白。
：サンクレイド
「お父さんは、気の毒、でした。真理まであと一歩だったのに。
アナタたちは、前回の戦いで、最後まで勝ち残――」
：綾香
「帰って」
気圧されながらも神父を睨む綾香。
サンクレイド、微笑むだけで動かない。
：サンクレイド
「なぜ準備をしていないのデス？　今日でちょうど八年。ようやく、再開できるというのに。他の方々は、みな、とっくに彼らを呼んでいます」
：綾香
「余所でやってください。わたしには関係ありません」
：サンクレイド
「それは悲シイ。だって、命のあるかぎり、この世に関係のないモノなどアリマセン。関係を断ちたいのなら、それはもう死ぬしかナイ」
綾香後ずさっていく。サンクレイド、笑顔で傍観。
：綾香
「こないで。わたしは、聖杯になんて関わりたくない」
去っていく綾香。
神父はその背中を見送りながら忠告する。
：サンクレイド
「今夜ですよ。それまでに、支度を調えておきなさい」
「零時を過ぎれば、誰もがアナタを訊ねに行く。みんな、アナタが放っておけないのです。事実上、前回の勝者であったサジョウの娘を。だって――」

綾香、逃げるように走り去る。
誰もいなくなった墓地で、ニタァと口端を釣り上げる神父。

：サンクレイド
「――だって。いちばん厄介なライバルは、いちばん最初に、みんなで潰しておくべきデショウ？」

■S03／ランサー襲撃

日が落ちて、夜。綾香は逃げるように帰宅。

：綾香
「関係ない、わたしは関係ない！」
冷静に見えるがサンクレイドの登場で半狂乱状態。
身を守る道具を集め（ウイッチクラフトの羽指輪）、家中を施錠し、電気を消して姿隠しローブにくるまって、部屋の隅で震えている。

：綾香
「あんなのの同類になるもんか！　だいたい、わたしには――」
ローブにくるまったまま、怯える子供のようにうわ言を繰り返す綾香。

ここで過去の回想。八年前の最後の夜。
（※まだ子供だったので綾香の記憶は虫食いだらけで、いまいち整合性がとれていない）
惨劇の光景だけがフラッシュバックする。
たくさんの女の子の死体。
血まみれの父。血まみれの姉。
姉を背後から突き刺す剣（エクスカリバー）。
なぜ、という顔の姉。狂気の顔で死に絶える父。
幼い綾香の顔に浴びせられる、大量の血液。

：綾香
「わたしには、あんなの、ぜったい無理！
お姉ちゃんみたいにはなれない……！」
現実に戻り、時計を凝視する綾香。いつのまにか午後11時過ぎ。
もうじき日が変わろうとしている。

：サンクレイド（M）
「今日が終われば、ようやく始まりです」
不吉な神父の言葉を飲み下すように、ごくりと喉を鳴らす綾香。
居間の柱時計が零時をさす。
ボーンボーン、という時計の音。
ビクッと怯える綾香だが、あたりは静かなまま。

：綾香（M）
「そうだ……いまさら、何が起きるハズもない。
「八年後に」、なんてお姉ちゃんの言葉は、なにかの間違いだ。
次はわたしの番なんて、考えすぎだったんだ――」
綾香がほっと一息ついた時、居間に犬の遠吠えが聞こえてくる。

：綾香
「犬の鳴き声……？」
何事？と顔を上げる綾香。窓にはりついて外の様子を見ると、

そこには大量の猟犬をつれた侵入者（ランサー）の姿が。

：綾香

「あの魔力のカタチ……サーヴァント！」

窓から飛び退く綾香。

猟犬たち、沙条邸に向かって突撃。

屋敷に備え付けられた侵入者迎撃用の術式が発動、犬は屋敷に到達する事なく倒れていく。

が、やはり数匹は館に到達、窓ガラスに体当たりして居間に侵入してくる。

綾香は怯えながらも廊下に逃げ、きっちり犬たちを迎撃。（※ひたすら怯えまくり、ネガティブな綾香だが、根は勝ち気なので泣き言を言いつつやる事はやる）

ウィッチクラフトの初歩の初歩、鴉羽を使った魔弾で侵入した猟犬を食い止める綾香。

（※カラス羽の魔弾は、凛の魔弾とは違うものを。一目で黒魔術と分かる有機的なエフェクトに。指輪から鴉の羽を大量にばらまく→鴉の羽の何枚かが弾丸になって射出される、というもの）

一方、屋敷に臨む庭で、犬たちを従えているランサー。

見るからにやる気がない。見ようによっては犬たちと語らっているようにも見える。

（※犬は美沙夜の使い魔。彼等を連れて行くようにと美沙夜に言われ、イヤイヤ承知したランサーであった）

：ランサー

「おいおい、どういうこった？　何の覚えもない女子供だって話はどこいきやがった？」

ランサー、美沙夜に話しかけるも、彼女の姿はない。美沙夜は遠く離れた自室でネイルの手入れなどをしている。

：美沙夜

「腐っても前回勝利者の娘……というわけ。私の使い魔で事足りると思ったけど――」

「いいわ、首を持ってきなさいランサー。夜も更けてきたし、十分で済ませてきて」

ランサー、やれやれと出陣。

綾香、長い廊下で猟犬たちとにらみ合っている。

パニック状態ながらも泣きだす一歩手前で食いしばっているのは、彼女の内弁慶的な負けん気と、犬相手ならなんとかなる、という状況から。

しかし、あれほど獰猛だった猟犬たちは息をひそめる。

暗闇の中から痩身の影、ランサー登場。

：ランサー

「あー、アンタがこの家のお嬢さん？」

気負うところのないランサーの言葉。

ぞわっっと総毛立つ綾香。死ぬ。何があっても殺される、と直感し、反射的にランサーへ魔弾を一斉掃射。手持ちの魔術をほぼ使い切る。

ランサー、獰猛な笑みのまま魔術の嵐に突進。そのまま綾香がいた場所を（適当に、やる気なく）槍でなぎ払う。

綾香は間一髪、さらに後ろの廊下へと逃げていた。

：ランサー

「ヒュウ、いい勘してるじゃねえか。……こりゃあ、ちょいともったいないかねぇ」

急いで屋敷の外、ガーデン方面へ走る綾香。

残った二頭の猟犬と共に、ひょうひょうとした足取りで追跡するランサー。

■S04／セイバー召喚

綾香、敷地の奥にあるガーデンに到着。

ガーデンの扉を閉め、施錠の結界を発動させ、奥に逃げ込む。

：綾香・父

〝ここの術式は誰にも破れない。万が一の時はここに逃げ込め〟

父の言葉が思い出される。

が、扉はランサーの槍の一突きであっけなく吹き飛ぶ。

外の闇から駆けだしてくる二匹の猟犬。

残った魔弾は二発。綾香はなんとか一匹の頭に命中にさせて撃退するも、もう一匹は綾香の体にのしかかる。

太ももに食いつかれる。服ごと、腕を引き裂かれる。猟犬はそのまま綾香の首に噛みつこうとし、その犬の腹に綾香はゼロ距離射撃。ぶっとぶ猟犬。綾香、倒れたまま、疲労と恐怖で動けない。

：ランサー

「なんだ、弾切れか？　それともやる気がなくなったか？　まあどっちにせよ、こっちのやる事は変わらねぇんだがよ」

近づいてくる痩身の影。

恐慌状態でランサーを見つめる事しかできない綾香。

：綾香（M）

「いやだ、いやだ、いやだ、いやだ」

「殺される、殺される、お姉ちゃんみたいに、殺される――！」

頭の中では悲鳴じみた台詞がリフレインしている。

ランサー、無造作に槍を構える。

：ランサー

「そろそろ十分か。ま、時間通りかねぇ」

閃く槍。

間近の死。

真っ白に焼き付く思考。フラッシュバックする八年前の映像。

：綾香

「助けて、お父さん――――！」

絶叫に呼応して綾香の胸に浮かび上がる令呪。

（※実は令呪ではなく、予め埋め込まれていた聖遺物）

ランサーの槍が綾香の胸を突き刺す。

しかし、ランサーは手応えの妙に眉を寄せる。

綾香の胸に光が集まっている。ガーデンの地面にはパズルのように回転し、完成していく召喚陣が。

綾香の中でさらにフラッシュバックする映像。

聖杯、集められた生け贄の少女たち、人を人と思わぬ悪魔の所

行、地下大空洞で狂ったように叫ぶ父、■■の手によって生け贄にされかかった八歳の綾香を抱き留める誰かの姿。

：綾香

「わたし、わたしは――」

「あんなのの仲間には、ならない。

あんなコトを許すオトナになんて、なりたくない――！」

綾香、二度目の、心からの絶叫。

この叫びは恐怖からくるものではなく、綾香本人が八年間押し殺してきた怒りそのもの。

セイバー召喚開始。ガーデンに光と風が吹き荒れる。綾香の蘇生の余波でガーデン中の草木がいっせいに花を咲かす。

：ランサー

「っ……!?」

押し戻される槍に、遊びから本気になるランサー。

片手持ちから両手持ちに切り替えるが、時既に遅い。

ひときわ強い閃光と共に現れる騎士の剣影。

はじかれる槍。咲き誇る花を散らしながらランサーに踏みこむセイバー。撃刃一合。大きく弾かれるランサーと、剣を振り払い、綾香の前に降り立つ騎士の姿。

サーヴァント・セイバー、現界。

両者の戦闘は数合の撃ち合いで終わる。

セイバーの視えない剣の前に槍を折られ、撤退するランサー。

茫然と二人の戦いを見ていた綾香に振り返り、手を差し伸べるセイバー。

かくして、月下の庭園で契約は交わされた。

■S05／美沙夜（I）

シーン04からの続き。

玲瓏館邸、美沙夜の私室。

館の主、美沙夜はソファーに座っている。その背後にはがらんどうの部屋が一つあり、ダリの絵のように歪んでいる。

歪む部屋の中心には赤い槍が浮いている。赤い槍はランサーの宝具。部屋ごと空間を歪めてランサーの宝具を封じているのだ。

（簡単に切り札を使わせない美沙夜の配慮。先の戦闘でランサーが使っていたものはただの槍）

セイバーに撃退され、戻ってきたランサー。

報告するランサーを罵倒する美沙夜。

：美沙夜

「獲物を仕留めず戻ってくるなんて。猛犬の二つ名は憧憬からじゃなく、嘲りから来たものだったのかしらね？」

ランサー、黙して我慢。

：美沙夜

「いいわ、過ぎた事をなじっても時間の無駄ですし。あの沙条の生き残りだもの、それなりの運はあったのでしょう」

「それで？　沙条はともかく、相手のサーヴァントは当然仕留めたのでしょう？」

：ランサー

「いや。手の内は見れたが、これがあっさり逃げられた」

いやあまいった、と言わんばかりに肩をすくめるランサー。あ

きらかにやる気がない。
美沙夜、ランサーにグラスを投げつける。グラスはランサーの顔の真横をかすめて壁に激突。

：美沙夜

「ああいやだ、いつから私のサーヴァントは番犬以下になったのかしら！　猛犬の名も地に落ちたものね！」

■S06／キャスター初戦

没シーン。こういう流れで進んでいる、といった参考として。
舞台は夜の学校。綾香&セイバーは襲われた側。
セイバー、綾香を狙われているため本領発揮できず。
キャスターの遠隔魔術。校舎そのものを異界化させている。
何の礼装も用意していなかった綾香にとって、校舎は死の罠だらけ。
セイバーは綾香を守りながらキャスターと戦わなくてならず、結果、遅れをとる。綾香が自分の身を守れればこんな事にはならない、というシーン。
（※ここを映像にするなら相手はキャスターではなく美沙夜に変更するのもアリ）
学校の異界化はキャスターに因縁のあるライダーの暗躍で解除され、綾香はなんとか生還する。

■S07／沙条邸にて

セイバーを召還しても、まだ「戦いはイヤ」と反発している綾香。

：綾香（M）

「私には才能がない」
「お父さんが期待していたのは、姉さんだった」
「でも、その姉さんでさえ、生き残るコトはできなかった」
モノローグで自分に対してダメ出しを続ける綾香。
自分を巻き込む周りの他人たちにも、逃げてばかりの自分にもイライラしている。
そんな綾香に、セイバーは余裕げに微笑むばかり。

：綾香

「私は聖杯なんて知らないし、いらない」

：セイバー

「でも、戦わないと殺される。君だけじゃない。多くの人が犠牲になるよ」

：綾香

「それこそわたしには関係ない！　わたしは自分だけで精一杯なの！　顔も知らない人たちのために戦うなんて、ホントにバカみたいじゃない！」

：セイバー

「戦いなんて総じて馬鹿げたものだけどね。それより今の主張は気になったな。人の為に戦うのはバカみたい、と言うけれど。それじゃあ君は、賢い選択をする為だけに生きているのかい？」

：綾香
「っ――！」
綾香、顔を真っ赤にして文句を呑み込む。

◆

正午、沙条邸居間。セイバーと綾香のいつもの口論。
：綾香
「わたしは戦いたくないって言ってるのに、どうしてわたしに構うんですか!?」
：セイバー
「綾香が僕のマスターだからね。たとえ君が最下位のマスターで、臆病で我が儘で、黒魔術しか使おうとしない女の子でも、守らないといけないだろう？」
「なんていうか、ほら、騎士として」
：綾香
「わたしは守ってほしくなんかありません！　そんなに強いマスターがいいんなら、美沙夜さんのところに行けばいいじゃないですか！」
：セイバー
「ん？　それは難しいな。たしかにマスターの変更はサーヴァントとマスターが同意すればできるんだけど……」
なぜ？と顔をあげる綾香に、セイバーは嬉しげな微笑み顔で、
：セイバー
「僕は綾香の方が好きだ。君を、今度こそ守ってみせる」
と返答。騎士というより王子の雰囲気。
綾香、困り顔で赤面しつつ、〝今度こそ〟という発言にひっかかりを覚える。
：綾香
「セ、セイバーさんは、以前もこういうコト、してたんですか？」
：セイバー
「こういうコト？　さて、綾香ぐらいひねくれた女の子のお守りをするのは初めてだけど」
：綾香
「そうじゃなくて、聖杯戦争について訊いてるんですっ！」
：セイバー
「もちろん。八年前、この街で最後まで戦った。その時の記憶は曖昧だが」
セイバーは前回の戦いの記憶は曖昧だと言い張る。
細かい部分は本当に忘れているが、大部分は覚えている。
（→綾香の姉の愛歌が自分のマスターだった事、殺されそうだった綾香を助けた事、最後に愛歌を仕留めた事は覚えている）
：セイバー
「しかし、いまいち他人行儀だな。そのメガネ、外した方が元気なんじゃないか、君？」
綾香赤面むかっ。
綾香はメガネをつけていると優等生喋りで、はずすとstay night の遠坂凛っぽい素になる。

■S08／ライダー

サンクレイドの情報から、不穏な動きがあるという工場地帯の調査に赴くセイバーと綾香。

工場は血と肉、腐食した鉄の匂いで充満していた。

オートメーション化されたコンベアーの奥には死体の山が築かれている。山の中心には暗殺者の風貌をしたサーヴァントが腰を下ろしている。

鉄仮面のサーヴァント、ライダーである。

：セイバー
「これは貴様の仕業か」

：ライダー
「そうだといったら？」

ライダーの無法に怒りを表すセイバーと綾香。

：セイバー
「協定を忘れたか。無闇な殺戮は、マスターに咎が及ぶぞ」

：ライダー
「ああ、知っているとも」
「けど、罰を受けるマスターなんて、とっくにいないよ」

クッ、と仮面の下からはくぐもった笑いが聞こえる。

：ライダー
「ワタシは自由だ。マスターには縛られない。死の間際に令呪をすべて使わせて、この体を受肉させたのだからね」

：セイバー
「貴様、マスターを殺したな……！」

ライダーはマスターを殺し、自由になったサーヴァント。

マスターがいない為、体を維持する為の魔力を人々の命で補充している。

：ライダー
「魔術師風情に聖杯は過ぎたものだ。英霊であるワタシが、正しく、あるがままに使わせてもらう」

セイバーとライダー、激突。

多くの宝具を持ち、工場中に罠をしかけたライダーは戦闘を優位に進める。なによりサーヴァントではなくマスターを狙うライダーの戦闘スタイルは、身を守る術に乏しい綾香にとって最悪の相手。

ライダーは綾香を押し倒し、あと一手で仕留めるところで一瞬だけ躊躇し、その隙をセイバーにつかれ、撤退。

◆

また、このシーンでは綾香の葛藤と迷いを描く。

罪もない被害者の死体の山に、綾香は現実をつきつけられる。

：綾香（M）
「人……人が、死んでる」
「顔も知らないなんて、嘘だ。無関係だなんて、誤魔化しだった」
「だって知ってる。知ってる人もいる。見たことがなくても、この人たちはわたしの知っている人たちだ」
「同じ街で暮らしているのなら、関係のない人なんて、一人もいない」

自分が消極的だったせいで、彼等はサーヴァントの犠牲になった。

：綾香

「わたしが――」

「わたしが、あの時。

戦いから逃げなければ、この人たちは――」

綾香の覚醒スイッチ、ちょっと入る。

■S09／美沙夜（Ⅱ）

玲瓏館の中庭。

ペット兼使い魔である猟犬たちに餌を与えている美沙夜。

可憐な手でモツを鷲掴みにしている。グロテスクだがエロティシズムな仕草。それを傍らで、柱によりかかって見下ろしているランサー。

七人のマスターが揃ってから、はや七日。

ランサーは既にセイバー、アーチャー、ライダーと刃を交えているが、それ以降、自分から他マスターに仕掛けようとしない美沙夜に不信感が。

：美沙夜

「私の方針に不満があるのでしょう？　なぜ本来の武器で戦わせないのか。ここに至っても宝具の封印を解かないのは、裏切られるのを恐れているからではないのか、って」

：ランサー

「あ？　いや、それはねえよ。ゲイボルクがねえのはしっくりこねえが、まあ、ないならないでの戦いをするまでだ。

マスターとしておまえは正しい。残りの面子が見えるまで静観する事に文句はない。だが――」

美沙夜には時間がない。他のマスターと違い、美沙夜にはタイムリミットがあるのだ。上品に戦ってはいられない。いざとなればサンクレイドと手を結び、貪欲に立ち回らなければならない。

：美沙夜

「いいのよ。私の命と、私の信条は別のもの。秤にかける事さえおぞましいわ。少なくとも余裕があるうちは、まだ」

冗談とも強がりとも取れない言葉に、ランサー、やれやれと肩を落とす。また気の強い女に当たっちまったな、といった風。

ランサーは美沙夜を批難しているように見えるが、かつての師（スカサハ）に似た性根の美沙夜を気に入っている。

そんなランサーの心情を知ってか知らずか、おもむろに話をはじめる美沙夜。

：美沙夜

「サーヴァントとして召還される英雄には共通点があると知っていて？」

：ランサー

「あん？　なんだそりゃ？」

：美沙夜

「すべてのサーヴァントがそういう訳ではないのだけど。
生前、非業の運命を遂げたものが聖杯の声に応じるそうよ」
くすり、と愉しげに口元を釣り上げる美沙夜。超人でありながらも、結局は人間の業に縛られている英霊を嘲ているようにもとれる。
けっ、と悪態をつくランサー。

：ランサー
「どいつもこいつも未練があるって事か？　くだらねえな。生憎、オレには関係のない話だ」

：美沙夜
「そうみたいね。聖杯にかける願いを持つサーヴァントの方がみっともなくて好みだったけれど。アナタはとことんまで私の趣味に合わないわ」

：ランサー
「選ぶ前に気づけよ。恨みがましい奴隷がほしかったんなら、他にも色々あんだろうが」

：美沙夜
「女に殺された英雄が欲しかったの」
ぽつり、と本音を漏らす美沙夜。
年若い女主人はランサーに流し目を送りながら、

：美沙夜
「だって、女の怖さを知っているでしょう？」
冷酷に、しかし愉しげに微笑んだ。

■S10／聖杯戦争について

教会の礼拝堂で、神父（らしき人物）と魔術師（らしき人物）が話している。
聖杯戦争とはなんなのか。
七人の魔術師が聖遺物・聖杯の使用権を競い合う儀式。
stay night の聖杯戦争とは違い、非公式ではあるが、教会の実力者から正式に依頼されたもの。
聖堂教会の中心である百人以上の枢機卿のうち一人が秘密裏に模倣聖杯〇〇〇号を持ち出し、極東の地で奇跡の再現を企んだのである。
その目的は、七人のサーヴァントの魂を起爆剤（呼び水）にして、さらなる高位存在を召喚すること。
参加する魔術師たちには聖杯を願望器として売り込んでいた。
枢機卿は聖杯起動の暁には、その街は聖都化するものと信じていた。
善き魂である英霊を召喚するための小聖杯（シンボル）と、
多くの魂を溜めるための地下大聖杯（セイントグラフ）がある。
その下地以外は stay night の聖杯戦争とほぼ同じ。
主に仕え、教えに背いた聖職者は語る。

：神父
「聖杯がなぜ杯なのか、考えた事はあるかな？」
「アレは主の奇跡を、あるいは太古の神秘を証明する為の測量器

でもあるのだよ」
「杯とは水を受け止めるもの、あるいは溜める為のものだ。
だが主の威光によって作られたアレは、形而上のモノを溜める。
そう、人間の想念だ。熱量をもたぬ資源、物理法則では観測されないモノを、聖杯はカタチにする」
故に、聖杯は英霊を再現する。
絵空事にすぎない、人類史に夢想された共通の幻想を。
：魔術師
「それでは話が合わない。英霊を召還できた時点で、聖杯は役目を終えた事になる」
：神父
「然り。うむ、まさに然り。
君の言う通り、善なる想念から英雄は生まれるだろう。
……だが、嘆かわしきかな。多くの人間が望むものは善意ではなく、欲望という名の悪意だった。聖杯は――その発端からして、狂っている」

■S11／悪夢～綾香の回想

綾香の過去回想～八年前の光景。場所は大聖杯（地下大空洞）。
都市の地下にある立体魔法陣と、天然の溶鉱炉。
大聖杯の中は黒い泥状のものがスープ状になっており、海を模している。その海の向こうから、何かが招かれようとしている。
（※実際には混沌スープから受肉しようとしている）
大聖杯の崖の縁には■■によって拉致された生け贄（材料）の少女たちが並んでいる。
彼女たちは意識はあるものの、体は指一本動かせず、うつろな目で泣きながら、自分が鍋にくべられる番になるのを待っている。
そんな地獄じみた場所に、沙条・父、愛歌、八歳の綾香、セイバーがいる。
◆
泣いている綾香。
何者かの手によって聖杯に投げ込まれようとしている。
：■■
「みんな行儀よく順番待ちをしているけれど、綾香は特別だ」
「いますぐ落ちて、材料になりなさい」
「凡人には、それぐらいしか利用価値がないのだから」
崖下の奈落に引きずられていく幼い綾香。
それを凝視している、狂人めいた父親。
：沙条・父
「ああ、なんという事だ」
「この凡人め、凡人め、凡人め……！」
「おまえを選んだ私が間違いだった！」
父の罵倒に絶望し、最後の理性も崩壊する綾香。暗転。
……どれほどの時間が経ったのか。一瞬か、数刻か。
顔にかかった大量の血で気が付く綾香。
目の前には綾香を守るように立つ、姉・愛歌の姿が。

しかし愛歌はもう息絶えている。
背後から剣で刺され、その胸から刃が突きだしている。
〝なぜ？〟という表情のまま、愛歌はうち捨てられ、大聖杯の闇に落ちていく。
視線を横に落とすと、近くには元凶である父の死体が。
綾香、再び気を失う。

以上が前回の聖杯戦争の決着。
大聖杯起動まであと一歩まで辿り着きながら、父の心変わりによって殺された、沙条愛歌の物語。

■S12／サンクレイド

場面は玲瓏館の屋敷、図書室。
美沙夜がサンクレイドの資料を読んでいる。

：美沙夜
「サンクレイド・ファーン……教会が送り込んできた異端審問員……異端者も信徒も殺しに殺して罪を問われ、名前も国籍も変えて、今も異端審問を続けている……」
「聖人を気取っているようだけど、教会のためなら何であれ始末する代行者。魔術師としての技量なら私と同格かそれ以上。……ふん。間違いなく第一位のマスターでしょうね」

◆

そんなサンクレイドだが、物腰は神父の名に相応しい柔らかさであり、人格者として綾香に手を差し伸べる。
かつて、姉・愛歌も愛用した喫茶店にて、サンクレイドと密会する綾香。〝お互いサーヴァントは抜きで〟という取り決め。
（※日中かつ人前なので、綾香も誘いに乗った）

：サンクレイド
「ワタシは、聖杯戦争も、殺し合いも、否定します」
「アナタが聖杯戦争から降りたいのなら、マスターの責務から解放される手段を、見つけましょう」

：綾香
「……ありがとうございます。でも、なんだってわたしに、そんなコトを？」

：サンクレイド
「ワタシは平和主義者です。マスターの中で、アナタだけは、自分の意志で戦っているように見えないのです」
「加えて言うのなら、ワタシは人間の欲望が嫌いです」
「いえ、言い換えましょう。個人の持つ願望が嫌いです。聖職者として、聖杯戦争を許すコトはデキマセン」

サンクレイドの言葉に、安心より後ろめたいものを感じる綾香。
〝自分の意志で戦っていない〟それはとりもなおさず、綾香がただ逃げたがっている事を示している。

：綾香（M）

「私は何から逃げようとしてるんだろう」

「目を逸らしているのはマスターとしての自分じゃない」

「私は、単に――八年前のあの記憶から、目を逸らしたいだけなんじゃ――」

綾香、考えさせてほしい、とサンクレイドの前から去る。

綾香を見送りながら、サンクレイドは先ほどの自分の台詞を思い返す。

〝ワタシは人間の欲望が嫌いです〟

〝いえ、言い換えましょう。個人の持つ願望が嫌いです〟

ええ、と静かに微笑む金髪碧眼の神父。

：サンクレイド

「当然です。

だって――家畜に個性は必要ナイデショウ？」

■S13／綾香と美沙夜

綾香と美沙夜、セイバーとランサー、二度目の対峙。

セイバー不利。マスターの力量に差がありすぎて、ランサーに追い込まれる。

：美沙夜

「これでおしまいかしら？　第一位のサーヴァントも、私の前では無様なものね」

セイバー、深刻なダメージ。

悔しがりながらも美沙夜を睨む綾香。

：綾香

「あなたが強いわけじゃない。わたしがセイバーをうまく使えないだけよ」

：美沙夜

「だから、それが無様だと言っているのです。下等なマスターがセイバーを手にするなんて、おこがましいにも程があるわ」

「最優のサーヴァントは、最高のマスターが手に入れるもの。そうでしょうセイバー？　今ならまだ話を聞いてあげてよ。貴方、そんな小娘から私に乗り換えない？」

：セイバー

「いや。あいにくと一位のマスターには懲りているし――だいたい、君はいつから一位のマスターになったんだ？」

美沙夜、むかっときつつも、あらそう、とあっさり下がる。

セイバー、綾香を逃がすようにランサーと対峙。

そんなセイバーを見て美沙夜、ニヤリと笑う。

：美沙夜

「ランサー。マスターを殺すのは最後よ。ゆっくり、正確にいたぶりなさい。あの女がいるかぎり、彼は本気を出せないわ」

美沙夜によるセイバーいびり。ランサーの槍に貫かれるセイ

バー。

：綾香

「卑怯者……！　名門が聞いて呆れるわ！」

綾香の罵倒に、嬉しそうに身を震わせる美沙夜。

：美沙夜

「ええ。私、他人（ひと）の痛みを聞くのが大好きなの。それが見目麗しい美青年なら尚更よ。だから――セイバーは手足を貫いた後、私自身の手で、頭を潰してあげるわね」

美沙夜さん絶好調。

セイバー、傷つきながらも軽口をたたく。

：セイバー

「ひどいマスターだ。ハズレを引いたな、ランサー」

：ランサー

「ハ。テメエに言われちゃおしまいだぜ、セイバー」

襲いかかるランサー、

綾香を庇うように剣を横に向けるセイバー。

風王結界が解除され、綾香を安全圏まで運ぶ。ランサー、ついに現れたセイバーの宝具を前に、興奮を抑えきれない。

：ランサー

「黄金の聖剣――！」

「たまらねえ。たまらねえなあ、オイ！　腹の足しにもならねえ騎士道の最後の華！　騎士の中の騎士が、テメエのような優男だったとはな！」

悪態をつくも、ランサーは心底から歓びにうち震えている。

また、この時の会話は後々まで禍根を残す。

のちに、セイバーを失った綾香に、ランサーが「俺と契約しないかい？」とよってきた時、

：綾香

「ランサーさん、前に言いましたよね。わたしはハズレのマスターだって。わたし、まだ根に持ってますから」

：ランサー

「しつこいねぇ。だがまあ、ありゃあアンタのコトじゃねえよ。ヤロウの、前のマスターの事を言ったのさ」

と、ちょっとした伏線を口にする。セイバーの〝酷いマスターを引いたな～〟〝テメエに言われちゃ～〟は綾香の事ではなく、セイバーの前のマスターについての言。

■S14／英雄王ギルガメッシュ

場面、夕暮れの教室。

セイバーと綾香がいい雰囲気になりかけたところでアーチャー、ガラリと教室のドアを開けて登場し、教壇で熱弁する。

：アーチャー
「この戦い自体はよい。よい趣向だ。宝を求め、英雄同士が覇を競い合うは素晴らしい！　なぜ生前思いつかなかったかと歯がみするほどだ！　我はいま、かつてない喜びに感動している！」
ひとり昂ぶるアーチャーを警戒するセイバー。
アーチャーにドン引きな綾香。
：アーチャー
「だが。だが、二つほど気に食わんところがある。我はいたく気分を害している。なぜだか分かるか、騎士王？」
：セイバー
「さあ。おまえのような変質者の考えは、私には何とも」
：アーチャー
「一つは階位とやらだ！　我は地上で最も高みに至った英雄である。その我の上にまだ二人もいると聞いただけで、勢い己がマスターを殺しかけたほどだ！」
「しかし、バーサーカーは許そう。理性を失ってまで力を求めたのだ。特別に見逃してやる。だが――」
「貴様は論外だ、セイバー。
この世で最強の英霊たるは我一人。加えて――」
「その横にいるマスターがもはや許せぬ！」
：アーチャー
綾香、ビクッと反応。また『最弱のマスター』とバカにされるのだろうなー、と身構えたところに、
「美しいにも程がある！　我がウルクにすら、これほど我好みの女はいなかった！」
はいい!?と驚く綾香と、むっと眉をひそめるセイバー。
：アーチャー
「少女よ、どうか誓ってくれ。我はセイバーを倒す。その後、余の后となることを」
：綾香
「な、なに勝手なコト――」
とパニクる綾香と、綾香を庇って前にでるセイバー
：セイバー
「答える必要なんかないぞ、綾香。あの男の狂言は実現しない。前提条件が、そもそも成立しないからな」
：アーチャー
「ほう。たかだか聖剣使いが思い上がったな。国に滅ぼされた程度の男が、世界を滅ぼした男に刃向かうとは」
アーチャー、黄金の双剣を具現化させる。
：アーチャー
「よい、格の違いを見せてやろうではないか。我が終末剣エンキの前に、藻屑と消えよ」

■S15／ライダーとマスター

ライダーの回想。彼が召喚された時の話。
ライダーのマスターは（外見）十歳ほどの少年だった。
前回の戦いで生き延びた魔術師の一派が、マスター候補である少年を無理矢理、医療機械と魔術によって生かしている。
少年は前回の戦いで■■によって獣を植え付けられた犠牲者で、もはや生きる死体。
手足も腐れており、内臓もなかば機械。生身の部分は胸から上のみ。生きる死人のようなマスターに召還されたライダーは、マスターの少年を見て、

：ライダー

「――あれで、生きていると言えるのか」

と驚愕、戦慄する。
欲望のために少年を生かし続ける周りの魔術師たちへの嫌悪と、少年への憐れみ。
そんなライダーの憐れみは、すぐに尊敬と友愛に変わる。
心臓が脈打つたびに痛みをともなう命。針を呑むような呼吸。痛みの多さに釣り合わない、生の実感のなさ。あとは死を待つだけの少年は、しかし、あらゆる不平、不満、恨みをこぼさなかった。むごたらしい体でありながら、少年はまさに聖者だったのだ。
少年はライダーを召還し、彼と友人になれた事を喜んだ。
ライダーも少年の天使性に心酔した。
だが、ライダーを召喚した事で少年の余命はなくなり、七日の後、少年は痛みに覆われたまま息を引き取る。

◆

：少年

「僕には、友達がいませんでしたから」

死の間際、少年はライダーに告げる。
サーヴァントには非業の運命を遂げた英霊を選ぶものだが、自分はそうしたくなかった。自分の人生の中で、唯一の我が儘が、「幸運な英雄」を選んだ事だったと。

：少年

「不幸な英雄ではなく、僕は、幸福な人が良かった」
「だって――満ち足りた人が願うことは、きっと、幸せなものでしょう？　アナタが聖杯に願うことは、温かいものだと思うのです」

死ぬ寸前の体で、人々が平和でありますように、と夢見るように微笑み、少年は息を引き取った。
ライダーの心中に渦巻いたものは、悲しみと、敬いと、怒りだった。
酬われなかった少年の人生を悲しみ、
最後まで余人を恨まず、世の温かさを信じた心に頭（こうべ）をたれ、
彼を救わなかったすべてに、おぞましいまでの憤怒を覚えた。
ライダー、この瞬間に願いを決める。

このマスターに幸福を。
聖杯の力で蘇生させ、まっとうな人間としての幸福を与えると。

◆

ライダーは少年の最期を看取り、静かに病室（実験室）を後にする。モニターしていた魔術師たちは語る。

：研究者

心配は無用ですよミスター。召喚者は死亡しましたが、この仮面を擬似的なマスター相（フェイス）として使えば――へ？

刈り取られる生首。
ライダー、凍りついた貌のまま研究者たちを皆殺しにし、マスクを拾い上げ、街にとけこむ。
マスターからの魔力提供がないライダーは人間を殺し続けて魔力を補給するしかない。
大量虐殺、臓物まみれ、死体まみれの中でライダーは誓う。

：ライダー

「……幸福な人々を望んだ彼の為に」

眼下には繁栄を謳う街の夜景。

「――君たちを、皆殺しにする」

鉄の仮面が血の涙をこぼす。

生前、輝きしか知らなかった幸福の王子は血を吐くように宣言した。
自分の行いこそ、少年の望んだものを最も汚す事だと承知しながら。

■S16／地下教会・バーサーカー

綾香とサンクレイド、その二。話的には中盤ラスト。
バーサーカーVSセイバー。
セイバーは破れ、サンクレイドに交渉をもちかけられる綾香。

：サンクレイド

「セイバーを殺す気はありません」
「彼は獣の真相を知る、唯一の証人ですから。お嬢さん。アナタ次第で、生かしてオキマショウ」

セイバーの命と引き替えにマスター権の譲渡を迫るサンクレイド。この時点で綾香はセイバーにラブラブなので、従わざるをえない。

：サンクレイド

「セイバーのマスター権、たしかにいただきました。ご協力感謝しますよ、お嬢さん」

「ですが、セイバーは色々と故障しているので、一度、作り直さないとイケマセン。潰しなさい、バーサーカー」
「この――騙したわね！」

綾香、ウィッチクラフトで攻撃。
サンクレイドの足下に魔法陣が浮かび、魔弾をキャンセル。

：綾香
「対魔術……！」

：サンクレイド
「ハイ。ワタシ、用心深いですから。魔法陣を常に移動させないと、恐くてトテモ動けないのデース」
その事実に驚く綾香。

：綾香（M）
「魔法陣を動かすなんて聞いた事もない。それが本当なら、対魔術はセイバーと同格だ……！」

：サンクレイド
「ああ、それと。お嬢さんにはもう用はないですから、死んでくださいネ」

：綾香
「そんなコトだろうと思ったけど！　ワタシは平和的解決を望んでいます、ってのが口癖じゃなかったっけ!?　あなた、教会の人でしょう？」

：サンクレイド
「ハ。ハハハ。ギャハハハハハハ！　ああ、あれは嘘デース！　ワタシ、東洋人大嫌いですから！　特に日本人とか虫酸が走り

マース！」

◆

戦闘開始。
マスター一位のサンクレイドと七位の綾香では戦いにならない。
防戦一方、逃走するだけで精一杯の綾香。
くじけそうになるが、これまでの出来事がフラッシュバックして土俵際で踏みとどまる。
セイバーとの共同生活。八年前のトラウマ。そしてライバルである美沙夜の言葉。

：美沙夜（回想）
「魔術の腕は二流」
「それでも聖杯に手をかけた、沙条の跡取り娘なの？」
こき下ろされる綾香。
姉との比較から、綾香は自虐的になっている。
とにかく、いつも何かを恐れている。
自分では何もできない。失敗したくない、と。でも――

：美沙夜（回想）
「私が貴女を笑う理由を勘違いしているのではなくて？」
「魔術師としての才能、技量はただの数値です。上か下かを量る事はあれ、笑うなど下種のする事」
「私が笑うのは貴女の心。いつまでも夢の中にいる人を、対等のマスターだと思えるはずがないでしょう？」
美沙夜の指摘に、綾香は反論できない。

美沙夜の言う通り、綾香はまだ被害者にも加害者にもなりきれていない。そのどっちつかずさを美沙夜は「不快だ」と言っているのである。

：綾香

「わたし――わたしは……」

「お姉ちゃんみたいには、できない、けど……！」

深呼吸をして、覚悟を決めて、追ってきたサンクレイドを正面から待ちかまえる綾香。サンクレイド、様子の変わった綾香の空回りっぷりをさらに笑う。

：サンクレイド

「なぜ戦うのです！　しかも今更！　アナタでは勝利者にはなれない。最下位のアナタは、他のどのマスターにも勝つコトはできないというのに！」

：綾香

「そんなの、八年前から分かってる！

わたしには何もできない！」

自分にいい聞かせるように叫ぶ綾香。

かつてのセイバーの台詞が思い出される。

：セイバー（M）

「過程と結果はワンセットじゃない。それらは別のものだ。

結果を出せない努力に意味はない？　愚かしい詭弁だよ。

過程と成果はそれぞれ独立したものだ。時には選ぶこと自体が、答えになる事もある」

セイバーの台詞をうけて、キッと顔をあげる綾香。

目前には外道神父サンクレイド。

：綾香

「でも戦う。何もできなくても、戦いを選ぶことぐらいは、私にもできるんだから――！」

戦う意志、今までの弱い自分に決別する宣言。

セイバーが奪われたなら、今度は、私がセイバーを取り戻す！と。

◆

綾香とサンクレイドの戦いの終わり。

綾香にとって最大の敵であり、聖杯戦争を操っていた神父はここで消える。いまだ難敵は残っているが、綾香にとっての戦いはこれで終わり、と思われるが――

崩壊する地下教会の瓦礫に飲まれながらも哄笑するサンクレイド。綾香は最後の強がりだ、とサンクレイドを睨むが、サンクレイドは愉快げに笑うばかり。

：サンクレイド

「勘違いしているようデスから訂正しておきましょう。ワタシのマスター階梯は、七位以下の番外です」

「どうして、も何もないデショウ？　ワタシは僧侶です。そもそも魔術師ではアリマセーン！」

では一位は誰なのか――？

■S17／天の崩落（後）

シーンはSOの、セイバーVSアーチャーの最終決戦に戻る。両者の戦闘は地下鉄から地上へ。副都心のビル群を駆けながら戦う二人。摩天楼での空中戦。

無尽蔵の剣の弾幕でセイバーを撃つアーチャー、それらを躱しながらアーチャーに肉薄するセイバー。両者の実力は伯仲している。

アーチャーには王権宝具の成立条件が揃っている。セイバーも聖剣の円卓拘束がすべて可決している。共に必殺の機会を狙う戦い。

激戦の末、機はアーチャーに訪れる。地上にたたき落とされるセイバーと、高層ビル屋上から矢を構えるアーチャー。

：アーチャー

「決着だな、セイバー！」

双剣を繋ぎ、大弓に変形させて地上のセイバーへ矢を放つアーチャー。

：セイバー

「っ――！」

セイバー、眉間を狙う矢をすんでで躱す。

しかし――その矢は照準にすぎない。

アーチャーの切り札は、衛星軌道上に展開された〝終末剣エンキ〟である。

：アーチャー

「天を見よ！　滅びの火は満ちた！」

「来たれ、ナピュシュテムの大波よ！」

衛星軌道上の〝滅びの星〟が矢となって地上に落ちる。矢は空中で消滅し、巨大な魔法陣を展開。空間が割れ、ノアの洪水の逸話の原型となった大海嘯、ギルガメッシュ叙事詩の言うナピュシュテムの大波が都市に崩れ落ちる。

大海嘯に飲み込まれるセイバー。

：アーチャー

「これが世界を滅ぼすという事だ！　凡百の英霊が、この英雄王に歯向かった愚を呪え！」

全魔力を放出し、もはや一指も動かせない状態ではあるが、勝利者の義務として高笑するアーチャー。

だが。

：セイバー

「――いや。勝ち鬨をあげるのは早いぞ、英雄王」

：アーチャー

「ぬっ――!?」
激しい海流の中、深海から黄金の輝きが海を割る。
バチン、バチン、と音をたててキャメロットの13拘束がほどかれていく。

：セイバー
「約束(エクス)された――」

蒸発していく海水。
遥か地上から、天に君臨する王を射抜く眼差しがある。

：アーチャー
「っ、聖剣使い――ィ!!!」

：セイバー
「勝利の剣(カリバー)――!」

敗北を目前にし、怨嗟の声をあげるアーチャー。
振り上げられる聖剣の一撃が、滅びの星ごと不遜なる王を両断する。

■S18／獣

カメラ、雰囲気はうって変わって、地の底のような光景に。

サンクレイドが「ワタシ番外デース！」とカミングアウトした後。
では一位は誰なのか――？という疑問。
「その戦いで補充されるマスターは七人だけ」
「まだ他にいるとしたら、それは――」
「――前回の戦いの、生き残りだ」

・八年前、前回の終わりのワンカット
大聖杯を前にして微笑む愛歌。
地の底からわき上がる正体不明の肉の塊たち。

：沙条・父
「何をしている愛歌……！」
止めに入る沙条・父。その顔は娘（愛歌）の凶行を目前にして、病人のように青ざめている。
愛歌、天使のように笑う。

：愛歌
「なにって、これが聖杯の本当の使い方よ、お父さん。
あれ？　願いを叶えるとか、そんなふわふわした話を本気で信じていたの？」

大聖杯にくべられる生け贄の少女たち。少女たち、泣きながら大聖杯に落とされる。阿鼻叫喚の地獄絵図。

：沙条・父

「信じているのではない、事実なのだ！
聖杯は根源に繋がる為の架け橋だ、我らにとって千年の悲願であり、のちの千年に続く希望だ！
それを、こんな――おまえの欲望の為だけに使うなぞ！」
沙条父、愛歌を攻撃。
愛歌、あっさり無効化する。父ビックリ。

：愛歌

「根源への架け橋だなんて、そっちこそつまらないわ、お父さん」
「だって――」
カメラ、愛歌の目にズーム。
愛歌の目からその中へ、宇宙の深淵へ通じるように。

：愛歌

「だって。そんなところ、私、生まれた時から繋がっているもの」
父、絶句。
沙条父を襲う愛歌の触手。父、絶叫のままフェイドアウト。
父がミンチにされ、幼い綾香は理性崩壊寸前。
泣きながら隠れるも、愛歌はあっさり綾香を見つけ、生け贄にしようとする。

：綾香

「お姉ちゃん、どうして!?」

：愛歌

「だって綾香、凡人だし。材料になるぐらいしか、価値がないんだもの」
嘲りも悪意もない、無邪気で鬼畜な姉。
だが愛歌はその直後に殺される。
他の六人のマスターをものともせず、聖杯に近しい階梯まで至った愛歌も、その裏切りには対応できなかった。
というか、夢にも思わなかった。
自分のサーヴァントが、背後から自分を串刺しにする、なんて結末は。

：愛歌

「……あれ、セイバー？　なんで私を、刺しているの？」

：セイバー

「……僕も間違いを犯していた。この聖杯も、君も、狂っている」

：愛歌

「いた。痛い。痛いわ、セイバー。すごく、痛い。ごめんなさい。痛くて、アナタが何を言っているのか、分からない、の」
「哀しいわ。哀しいわ。痛くて、ほら、目が見えなくて、もう痛くて、ああ――」
「わたし、死ぬのね。哀しいわ。哀しいわ。もう、あなたの顔が、見られなく、なるなんて」
愛歌、まったく痛くない顔つきでセイバーに微笑みかけて絶命。
セイバー、愛歌の死体を大聖杯に棄てる。

――しかし。

・サンクレイドの語り。

聖杯とは、結局のところ何を呼ぶのか。

獣。第八のクラス・ビーストをカタチにする為の魔法の釜だと。

ビーストとは聖書にある「666の獣」。（この聖杯の基本デザインはキリスト教なので）

人間の業罪、欲望の象徴としての王冠を被った獣、をあらわす。

海の彼方からやってくる、黙示録に書かれた獣に他ならない。

・カメラは戻って現在。

セイバーがアーチャーにエクスカリバーを使用した後。

地下大聖杯の前で、童女のように無邪気に踊っている愛歌。ゾンビ状態。

躍る愛歌の背後には受肉しつつあるビーストと、六騎のサーヴァントたち。（前回戦争のサーヴァント）

：愛歌

「セイバー！　セイバー！　セイバー！　信じてたわ、必ずアナタが戻ってくるって！」

「ああ、大好きよセイバー。アナタを思うと、お腹から臓物（なかみ）がこぼれだしてしまいそうなぐらい、心臓を焼かれる痛みで夢から覚めてしまいそうなぐらい、大好き！」

「早く会いたい、早く会いたい、早く会いたい！　私のセイバー！　私の、私だけの王子様！」

「だってこの獣は――アナタの願いを叶える為に、この世に生まれ落ちるのだもの！」

――カメラ、暗転。

◆

主は語った。地に富を積んではならないと。

虚飾の繁栄を無に帰した時、次代の千年期は訪れる。

冨の象徴、人の七罪。

汚れに汚れた金の杯。

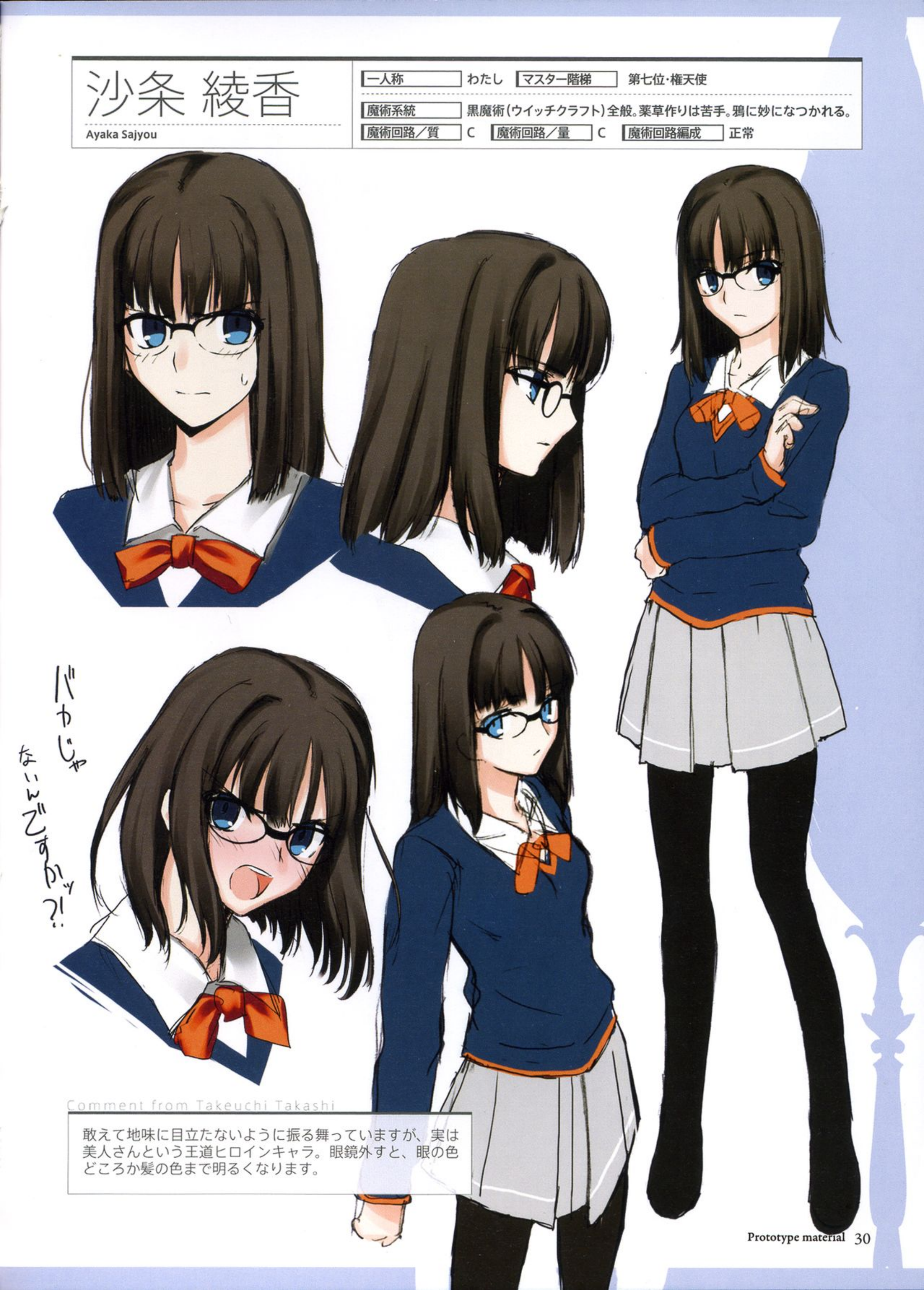
全ては天の門を開く為。

最後の奇跡は、最も優れたモノの手に。

沙条 綾香

Ayaka Sajyou

一人称	わたし	マスター階梯	第七位・権天使		
魔術系統	黒魔術（ウイッチクラフト）全般。薬草作りは苦手。鴉に妙になつかれる。				
魔術回路／質	C	魔術回路／量	C	魔術回路編成	正常



Comment from Takeuchi Takashi

敢えて地味に目立たないように振る舞っていますが、実は美人さんという王道ヒロインキャラ。眼鏡外すと、眼の色どころか髪の色まで明るくなります。

Explanation

主人公。一見おとなしめ、暗め。内面はツンツン、攻撃的。外見、過去、魔術師としての技量の低さ、そもそも魔術師である事にコンプレックスをもっているので、他人がいるところでは基本、ビクビクしている。

内弁慶。家では強気。（内弁慶の時はFate/stay nightの凛に近いが、あそこまで自信満々ではない。子供の我が儘に近いので）

八年前に他界した姉が天才だった事もあり、自分の平凡さがコンプレックスになっている。同じく八年前に死去した父親に「いずれおまえも聖杯戦争に参加する」と言われていたが、本人は絶対にイヤ、と逃げてきた。ランサーに殺されそうになった時、セイバーを召還・助けられ、仕方なく聖杯戦争に参加することに。

戦いを通じて、少しずつ性格改善していく。（というか、トラウマから脱却する）

セイバー

Sarvant Saber

一人称	僕、私（綾香には僕、敵には私）			サーヴァント階位	第一位
筋力	B	耐久	A	敏捷	B
魔力	E	幸運	C	宝具	C (EX)

Comment from Takeuchi Takashi

美形で泰然としている、90年代の理想の伝奇主人公像。私服はやっぱりロングコートでしょう。逢倉さんデザインの鎧がカッコイイです。フードとかマジ萌えます。

デザイン:逢倉千尋

Explanation

大人びた価値観、正義感。善良なるものを良しとし、悪逆なるものを糾す、気持ちのいいヒーロー像。ただし、言葉のはしばしにニヒルな物言いがまじる。(Fate/stay nightのアーチャーっぽい) 綾香にとってみれば理想の王子様、兼、保護者としての立ち位置。

運命改竄を願って聖杯の招きに応じる。八年前の聖杯戦争では最後まで勝ち残るも、聖杯入手目前で強制的に召還を破棄され、退場。その後遺症か、前回の戦いの記憶が曖昧である。……と本人は主張している。

真名はアーサー王。その宝具は言わずと知れた聖剣エクスカリバーだが、あまりにも有名なため風の魔術(Cランク宝具)で隠している。前回の戦いを経て"故国の救済"という願いからは解放されている。八年前、聖杯にかける望みが歪であると間接的に悟らせてくれた少女(綾香)の助けになるため、今回も召喚に応じた。

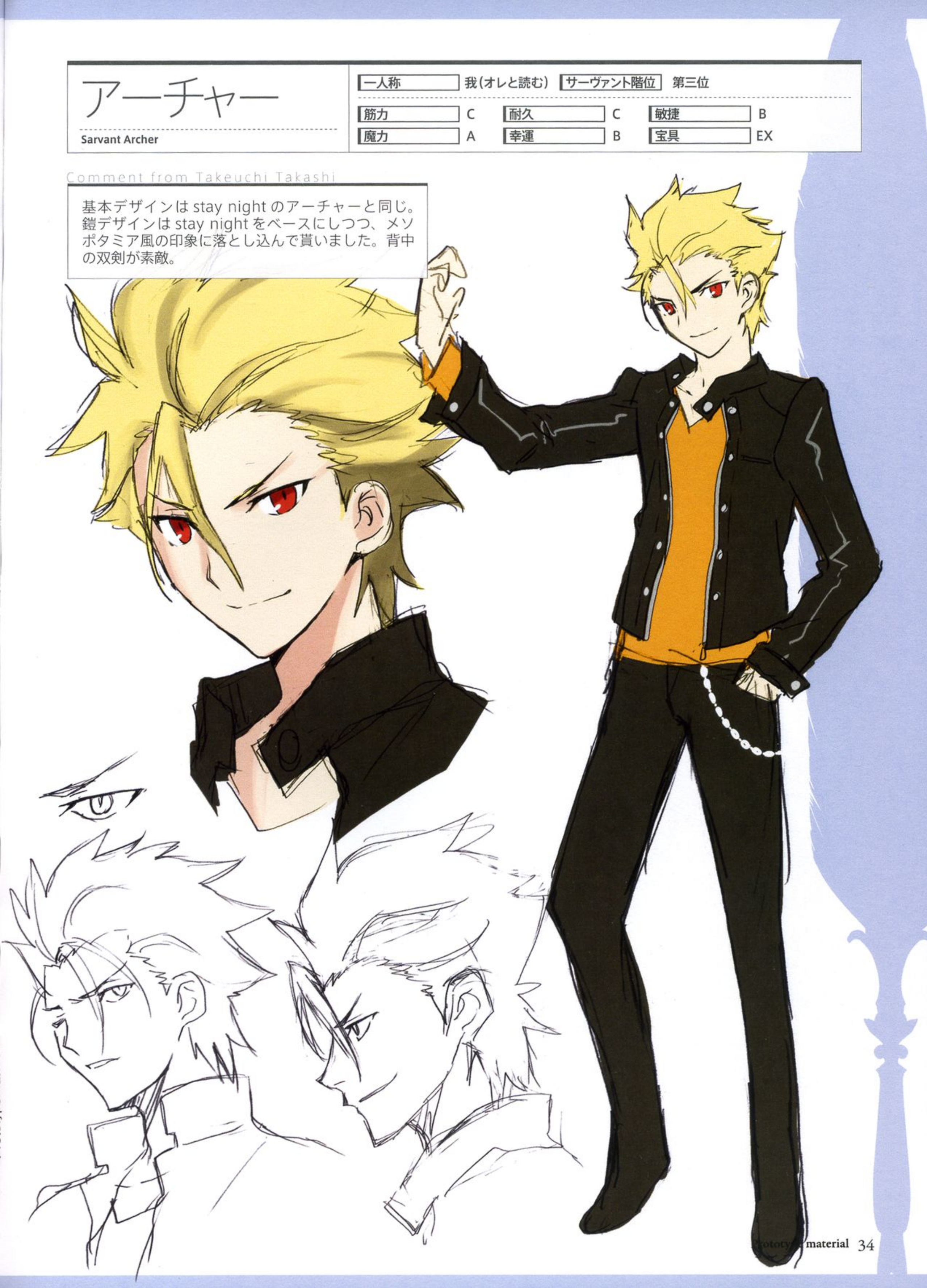
アーチャー

Sarvant Archer

一人称	我(オレと読む)	サーヴァント階位	第三位		
筋力	C	耐久	C	敏捷	B
魔力	A	幸運	B	宝具	EX

Comment from Takeuchi Takashi

基本デザインは stay night のアーチャーと同じ。鎧デザインは stay night をベースにしつつ、メソポタミア風の印象に落とし込んで貰いました。背中の双剣が素敵。



天上天下唯我独尊。だが、stay night のギルほど王様気質でも、空気読めない男でもない。マスターの影響か、他サーヴァントより現代社会に適応している。（※マスターは街を一望する高層ビルのオーナー兼社長）聖杯の奪取より自分が最強の英霊である事に固執する。冷酷だが、悪人ではない。なので、サーヴァント階位が自分より上のセイバーをライバル視し、メガネを外した綾香に一目惚れする。なにその少女漫画。真名は stay night と同じく古代ウルクの王、人類最古の英雄叙事詩を持つギルガメッシュ。宝具は王律鍵バヴ＝イル（王の証である入れ墨。宝物庫の鍵を開ける。stay night のゲート・オブ・バビロン）と、終末剣エンキ。エンキは水を呼ぶ剣で、発動から一日経つごとに激しさを増す。メモリ・七日目で大海嘯。ナピュシュテムの大波を呼ぶ。

■■からイシュタルと同系列の匂いを感じ取り、激しく嫌悪する。"自らの美に疑いを持たぬ女ほど、醜悪なモノはない！"

玲瓏館 美沙夜

Misaya Reiroukan

一人称	私(ワタクシ)	マスター階梯	第二位・智天使		
魔術系統	ルーン魔術、黒魔術、降霊術全般。				
魔術回路／質	A	魔術回路／量	B	魔術回路編成	異常(鏡像概念への偏りあり)

Comment from Takeuchi Takashi

stay night の遠坂凛の原型となったキャラ。今回改めてデザインし直しましたが、原作のイメージに忠実にデザイン出来たかなと思っています。

Explanation

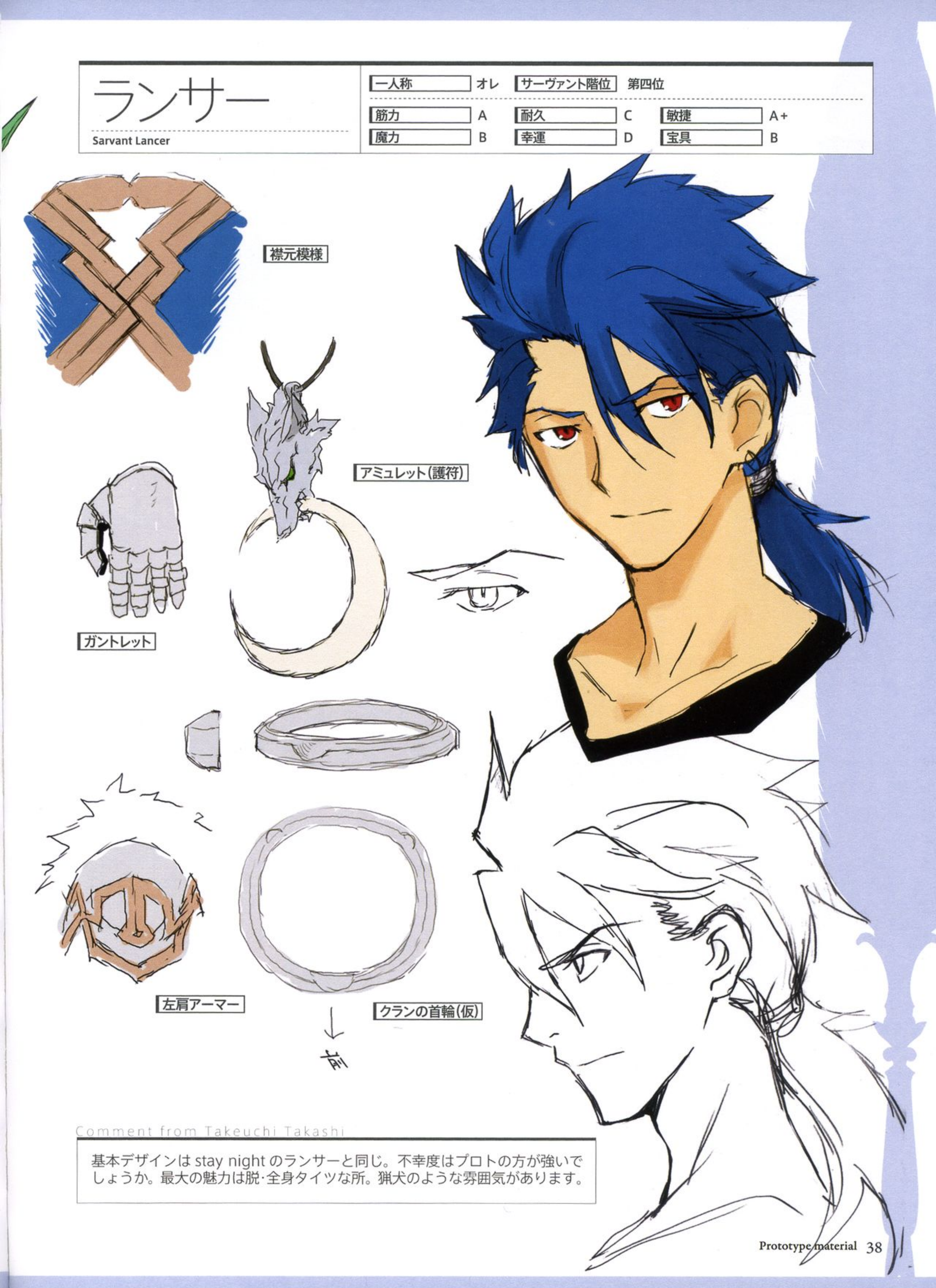
完璧な美少女。プライドが高く、華やかで残忍。ドＳ。綾香のライバルお嬢キャラだが「オホホホ」系にはならないように。沙条より数段上の魔術の名門。父親たちはそれぞれ旧知だったが、綾香の事は彼女がマスターになるまで知らなかった。ちなみに聖杯戦争におけるマスター階梯では、智天使と座天使は同役職とされている。

聖杯成就にかける父親の執念で「マスターになって聖杯を手に入れないと死ぬ」呪いにかけられている。どうあれマスターになった以上は勝ち残らないと死ぬのではあるが。……実のところ、呪いをかけたのは父親ではなく■■。美沙夜の父は娘にかけられた呪いをとこうと足掻いたが解くことはかなわず、■■によって殺された。物語中盤以降、呪いが全身にまわり、死亡。以後、堕天状態で徘徊する屍人となる。

ランサー

Sarvant Lancer

一人称	オレ	サーヴァント階位	第四位		
筋力	A	耐久	C	敏捷	A+
魔力	B	幸運	D	宝具	B



Comment from Takeuchi Takashi

基本デザインは stay night のランサーと同じ。不幸度はプロトの方が強いでしょうか。最大の魅力は脱·全身タイツな所。猟犬のような雰囲気があります。

Explanation

荒っぽいが気持ちのいい男。正義も悪党も「どちらが上か」などと口にしないが、根は正義より。Fate/stay night のランサーそのもの。ただし、若干年齢が若い。あそこまで大人な男ではない。(二十歳ぐらい。世の理不尽、善悪の等価値さなどを飲み込めるほど、大人ではない。そういった意味でいうと stay night の士郎に似通っている)

動物使いでもあり、美沙夜が飼育している使い魔たちとの相性も抜群。真名は stay night と変わらずクーフーリン。宝具もお馴染み、当たらない必中の槍・因果逆転のゲイボルク。……なのだが、簡単に切り札をだしては優雅さに欠ける、と美沙夜によって封印されている。美沙夜が■■によって堕天した後、美沙夜を殺す事を交換条件に、セイバーを失った綾香のサーヴァントとなる。

ライダー

Sarvant Rider

一人称	僕	サーヴァント階位	第五位		
筋力	D+	耐久	E+	敏捷	B+
魔力	B+	幸運	A+	宝具	A B C D E

Comment from Takeuchi Takashi

並べてしまうとネタバレ全開です。自分にしては珍しい部類のデザインですが、その分気に入っています。学生服の時の、二面性が面白いキャラです。

Explanation

マスターを失ったはぐれサーヴァント。一般学生に変装している。綾香と同級生。優しいルックスをした、一見チャラ男風の美男子。人当たりがよく、涙もろく、心優しい青年だが、感じ入ったものにとことん尽くす短所がある。ある意味、彼も異常者の一人。

一度悪行に手を染めると決めたら、優しい性格と笑顔のまま無実の人々を惨殺してまわるのだから。真名はギリシャ神話の英雄、ペルセウス。サーヴァント中、ただひとり“不幸な結末”を持たない。数多くの宝具を操るが、一度に一つしか使用できない縛りがある。空を駆ける羽のサンダル、被った者の姿を変えるマント（神話では兜）、アテナより贈られた青銅鏡の盾（レーダー、ソナー）、蛇狩りの鎌ハルペー（不死身殺し）、魔物の首をおさめる袋キビシス（鏡像結界）、そしてstay nightでおなじみのペガサスを駆る手綱（ベルレフォーン）。

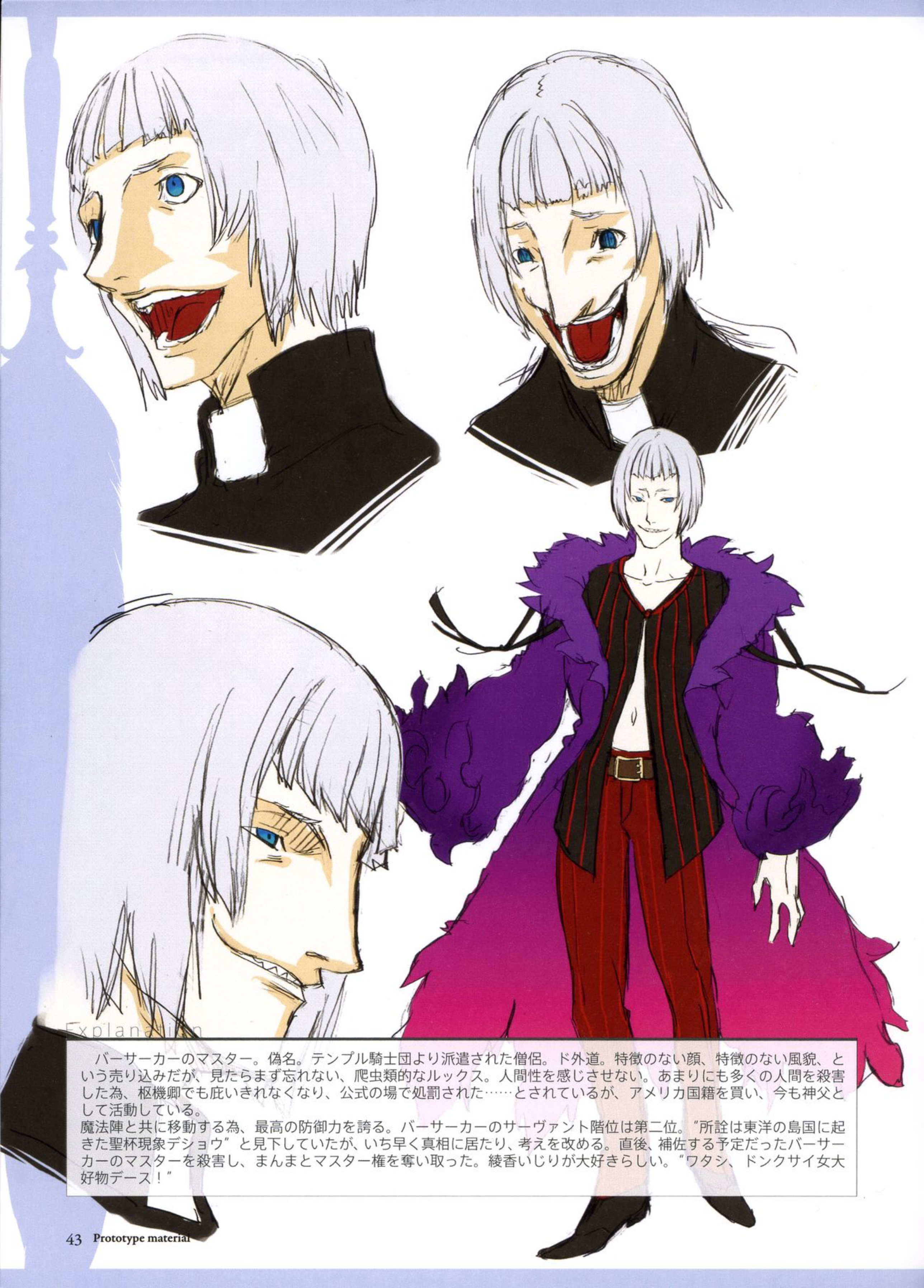
サンクレイド・ファーン

Sancraid Phahn

一人称	私	マスター階梯	不明		
魔術系統	聖堂教会・第八秘蹟				
魔術回路／質	C	魔術回路／量	A	魔術回路編成	正常（若干の変調あり）

Comment from Takeuchi Takashi

特徴の無い顔つき…というコンセプトでデザインしていたはずなのに、何故かこんなキャラに。制作現場ではやけに人気がありました。



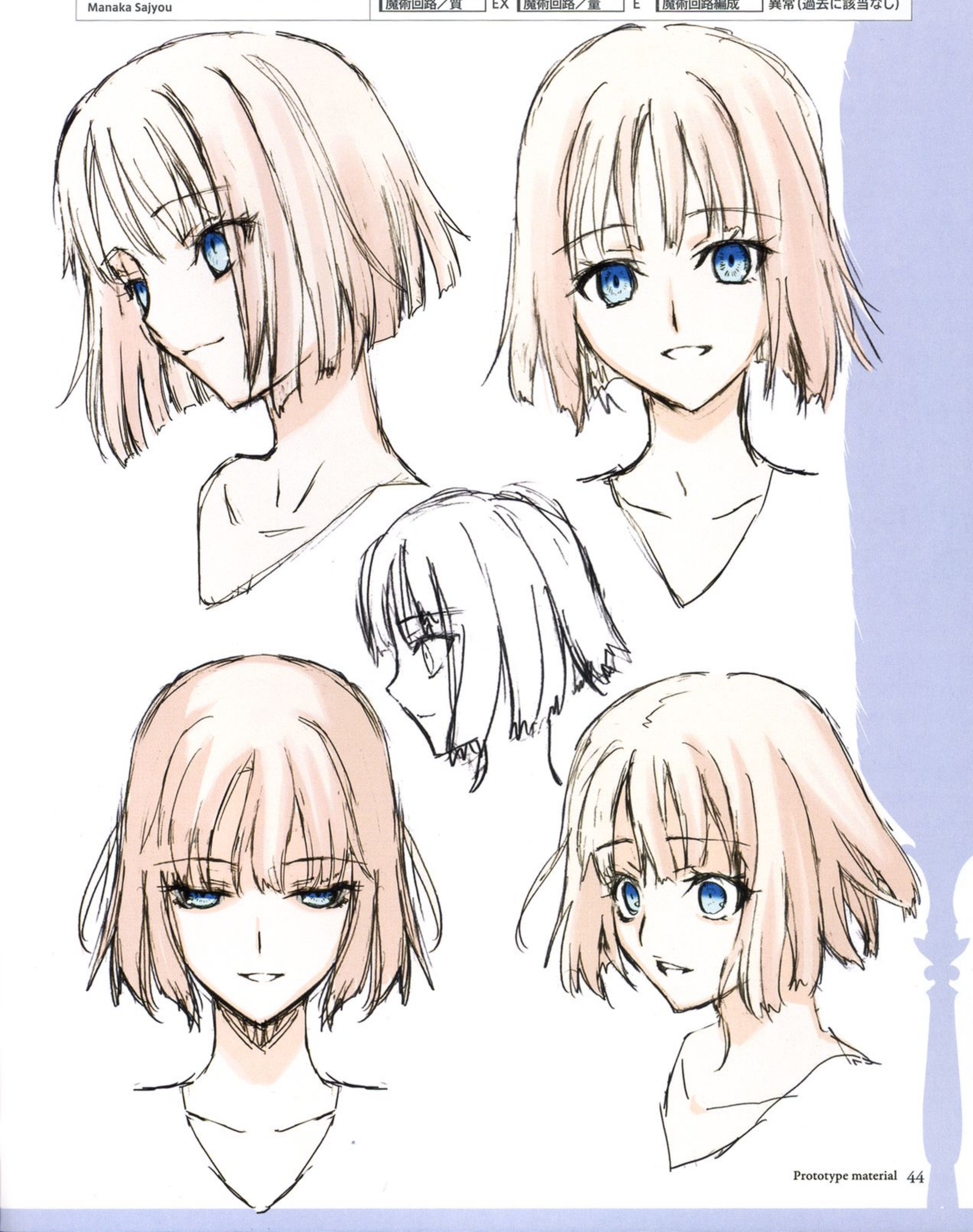
Explanation

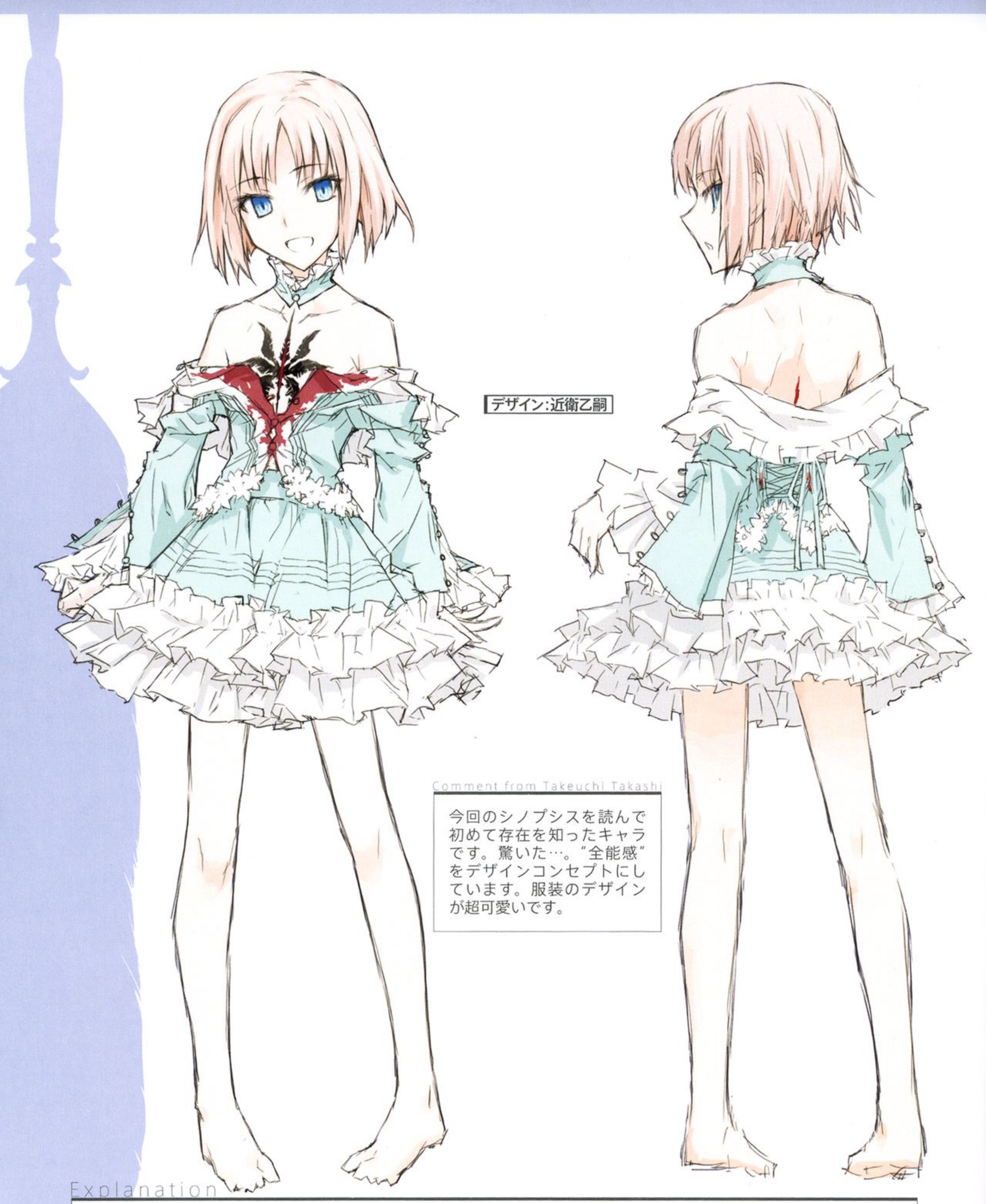
バーサーカーのマスター。偽名。テンプル騎士団より派遣された僧侶。ド外道。特徴のない顔、特徴のない風貌、という売り込みだが、見たらまず忘れない、爬虫類的なルックス。人間性を感じさせない。あまりにも多くの人間を殺害した為、枢機卿でも庇いきれなくなり、公式の場で処罰された……とされているが、アメリカ国籍を買い、今も神父として活動している。
魔法陣と共に移動する為、最高の防御力を誇る。バーサーカーのサーヴァント階位は第二位。“所詮は東洋の島国に起きた聖杯現象デショウ”と見下していたが、いち早く真相に居たり、考えを改める。直後、補佐する予定だったバーサーカーのマスターを殺害し、まんまとマスター権を奪い取った。綾香いじりが大好きらしい。“ワタシ、ドンクサイ女大好物デース！”

沙条 愛歌

Manaka Sajyou

マスター階梯	第一位・熾天使
魔術系統	なし。
魔術回路／質	EX
魔術回路／量	E
魔術回路編成	異常（過去に該当なし）





デザイン:近衛乙嗣

Comment from Takeuchi Takashi

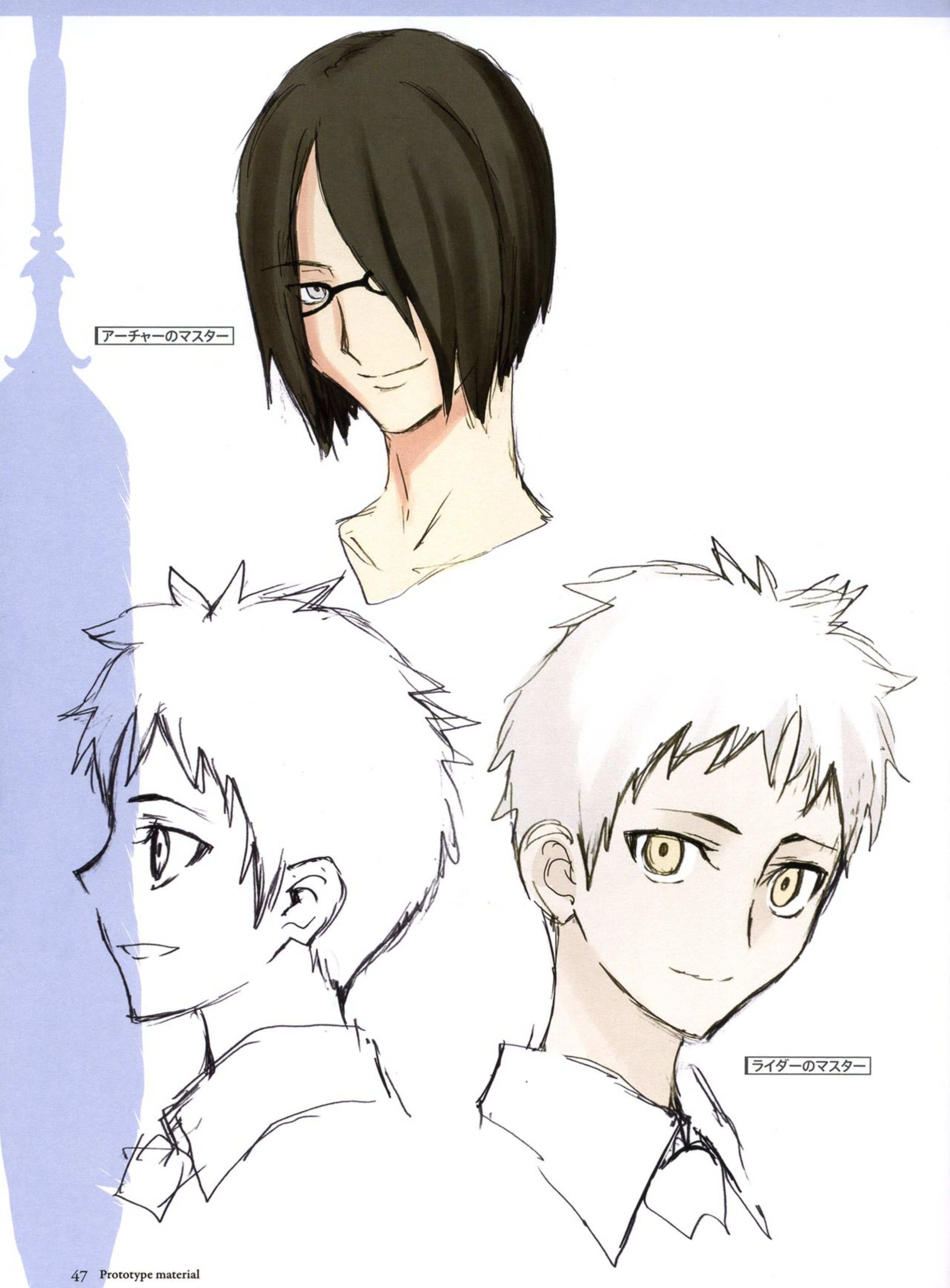
今回のシノプシスを読んで初めて存在を知ったキャラです。驚いた…。"全能感"をデザインコンセプトにしています。服装のデザインが超可愛いです。

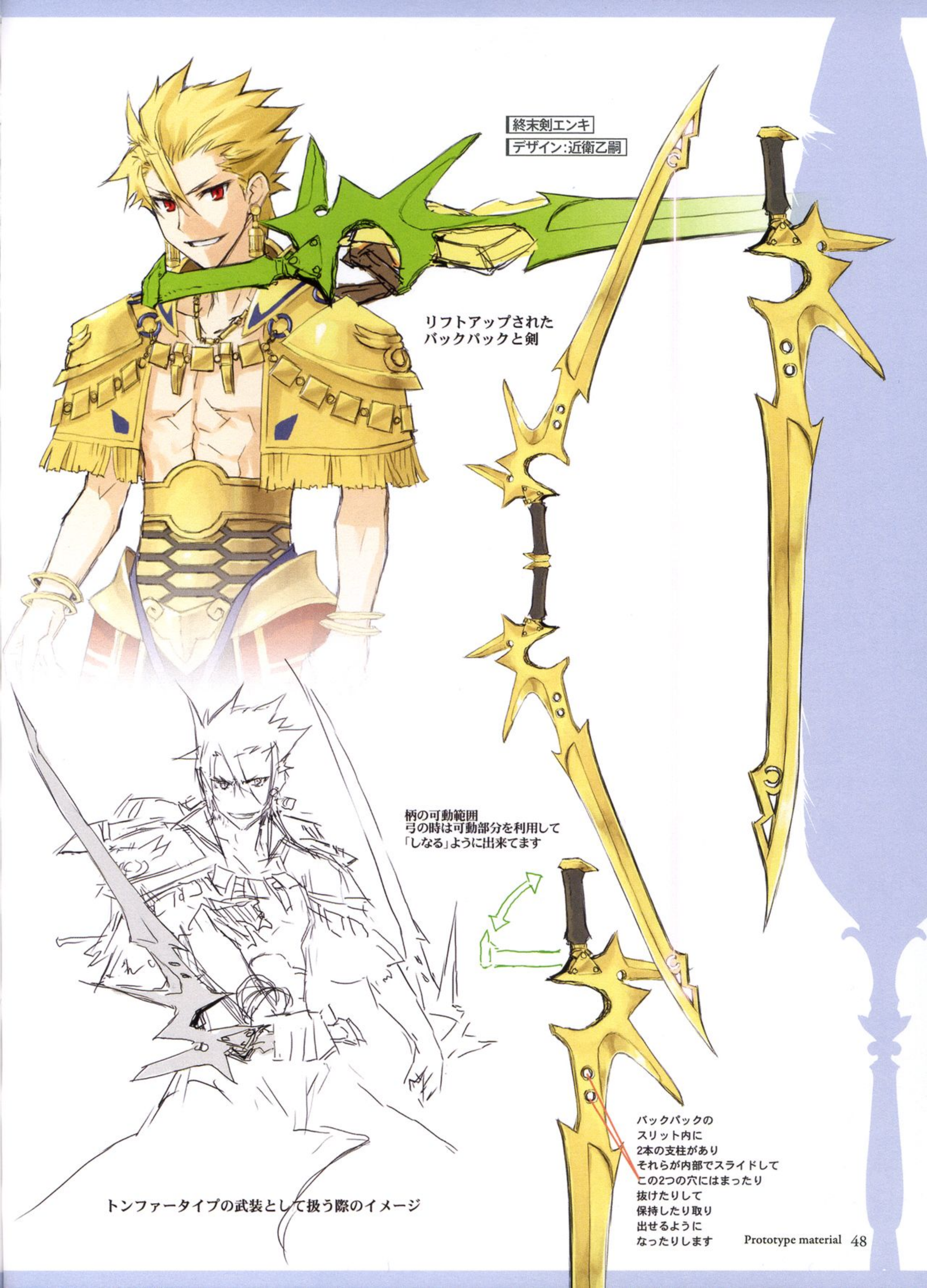
Explanation

何かの間違い。綾香の姉。八年前の聖杯戦争にて死去。その時のサーヴァントはセイバーだった。
セイバーが好きで好きでたまらない、一途で健気な夢見る乙女。
聖杯の力で半ゾンビ状態。クラス・ビーストを召還するマスター。

綾香父

愛歌ドレス(完全時)


アーチャーのマスター
ライダーのマスター



トンファータイプの武装として扱う際のイメージ

エクスカリバー
デザイン:RAITA

令呪・一位

階梯：一位
翼数：7 枚羽
天使階級：熾天使（Seraphim）
保持者：沙条愛歌
刻印位置：胸部中央
サーヴァント：ビースト

令呪・二位

階梯：二位
翼数：6 枚羽
天使階級：智天使（Cherubim）
保持者：玲瓏館美沙夜
刻印位置：うなじ
サーヴァント：ランサー（階梯 4 位）

令呪・三位

階梯：三位
翼数：5 枚羽
天使階級：座天使（Thrones）
保持者：ライダーのマスター
刻印位置：左掌
サーヴァント：ライダー（階梯 5 位）

令呪・四位

翼数：4 枚羽
天使階級：主天使（Dominions）
保持者：未定

令呪・五位

階梯：五位
翼数：3 枚羽
天使階級：力天使(Virtues)
保持者：アーチャーのマスター
刻印位置：左貌
サーヴァント：アーチャー(三位)

令呪・六位

翼数：2 枚羽
天使階級：能天使(Powers)
保持者：未定

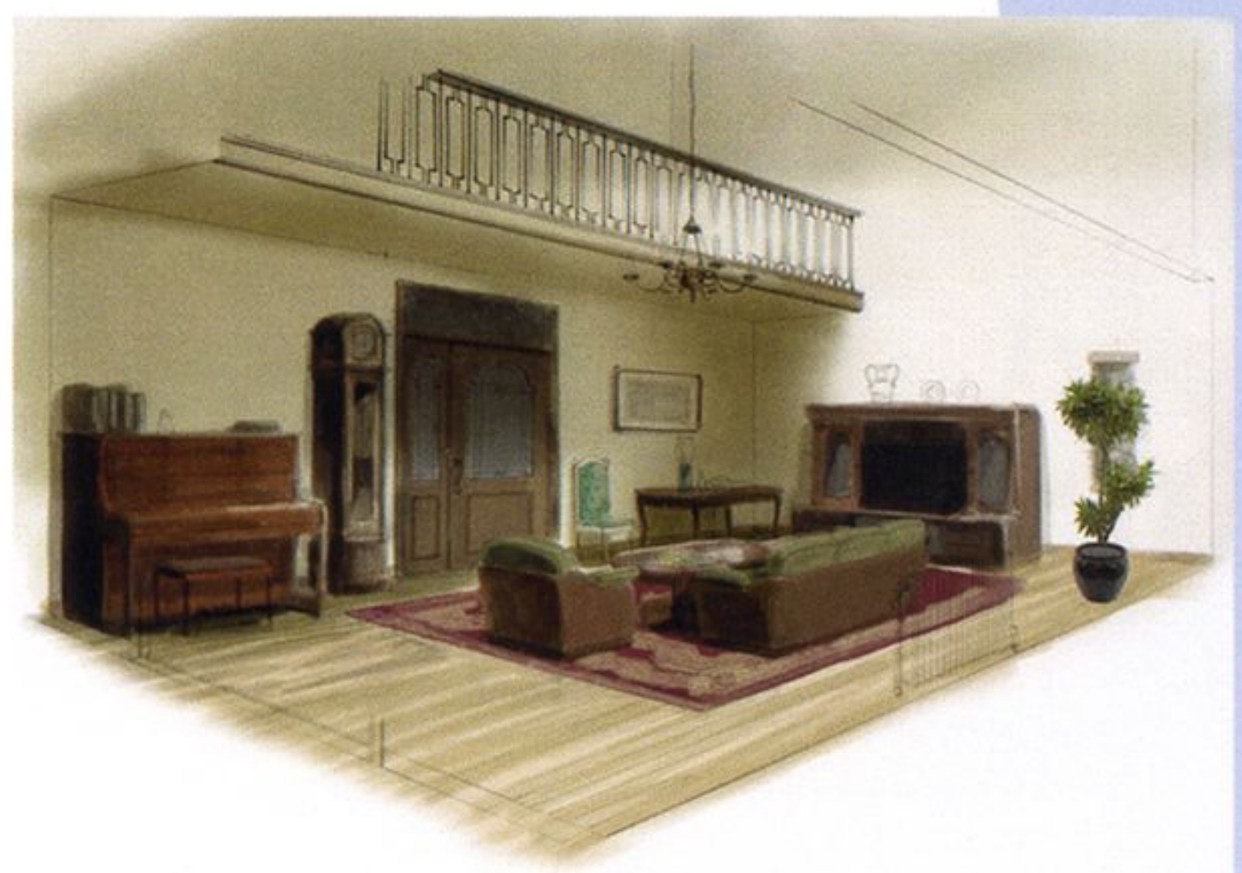
令呪・七位

階梯：七位
翼数：1 枚羽
天使階級：権天使(Princes)
保持者：沙条綾香
刻印位置：胸部中央
サーヴァント：セイバー(一位)

令呪・番外

保持者：サンクレイド・ファーン
刻印位置：舌
サーヴァント：バーサーカー(二位)

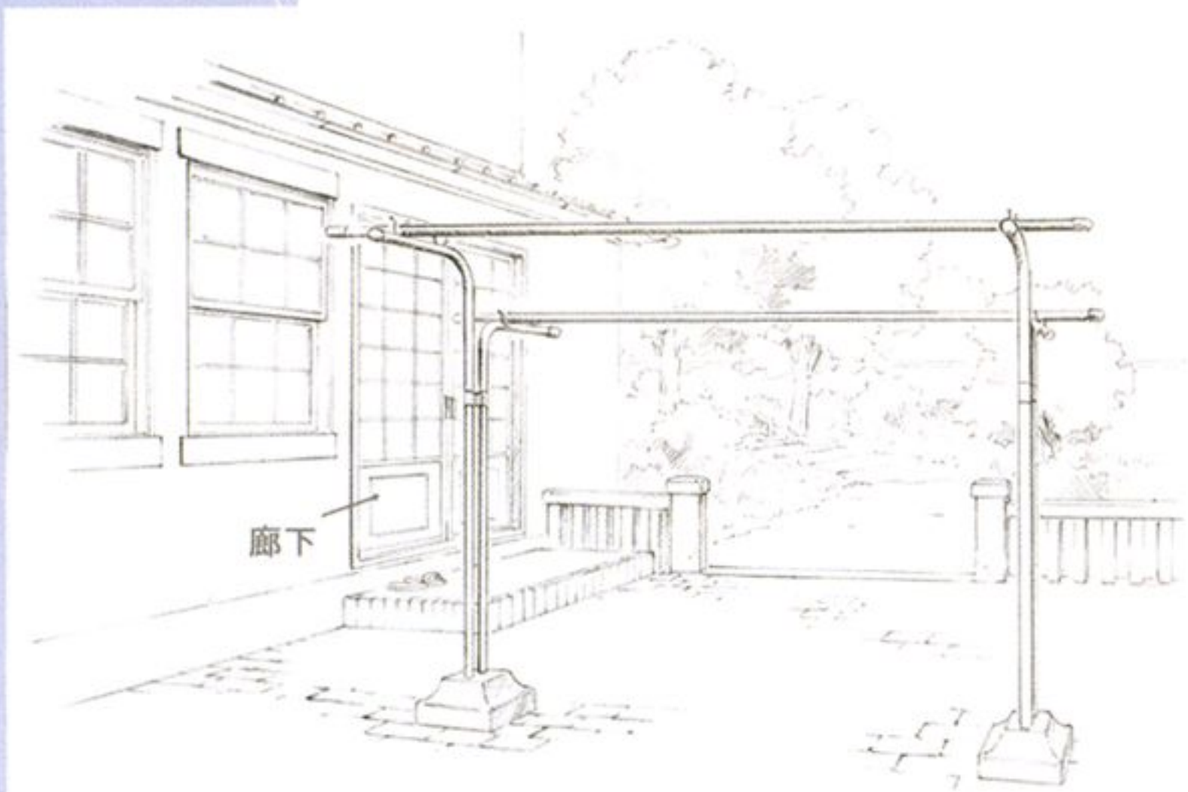
沙条家外観



リビング

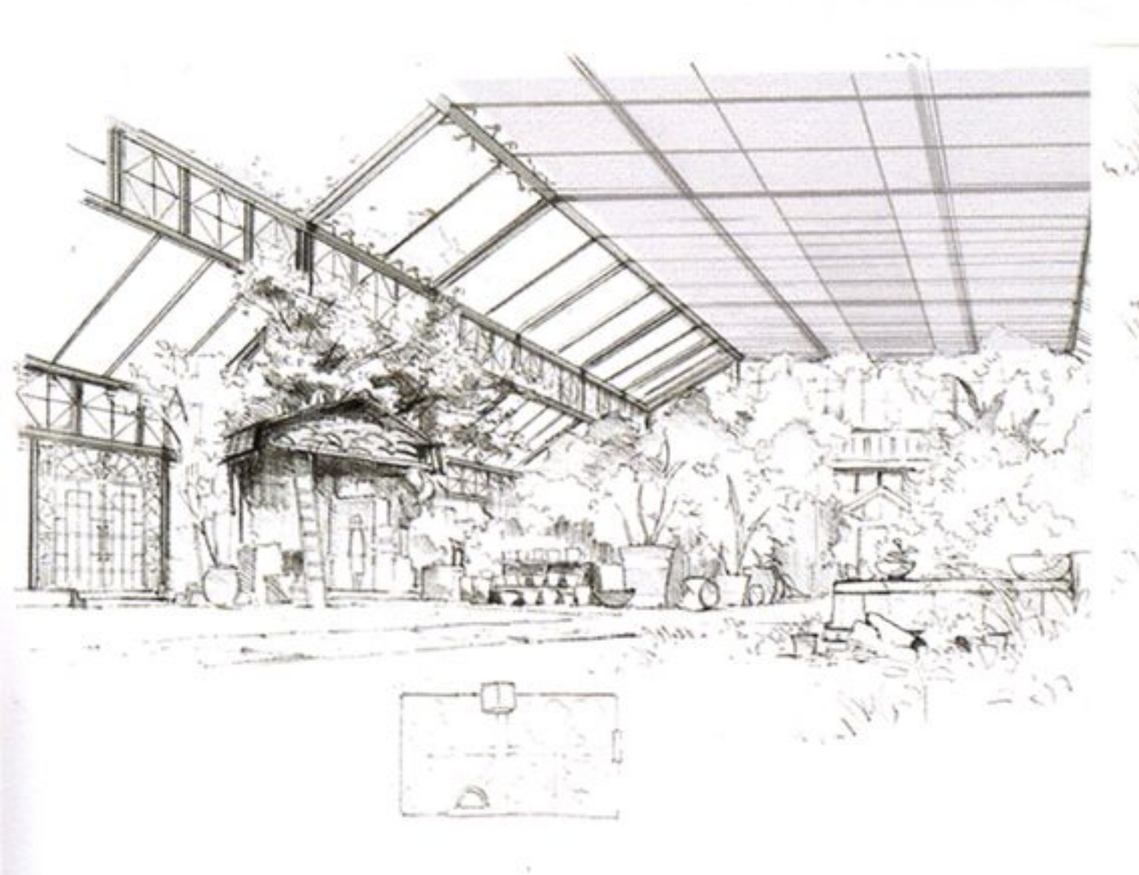
廊下

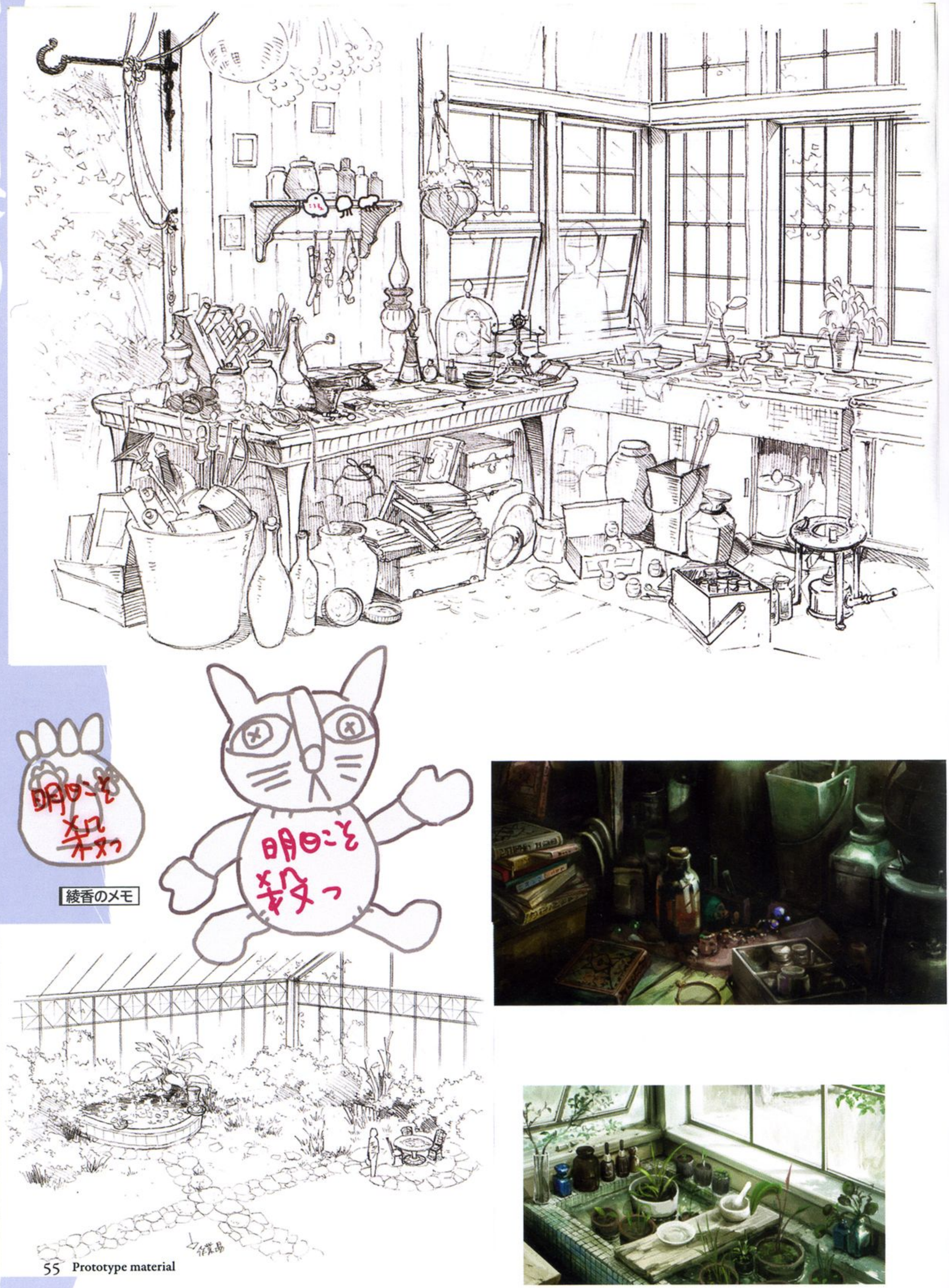
中庭



綾香の部屋

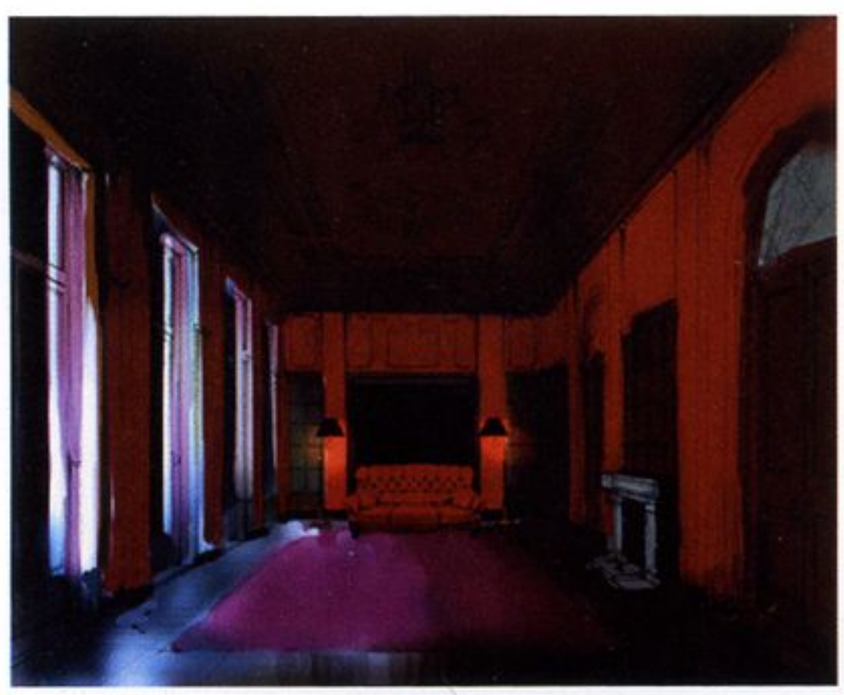
沙条家ガーデン(魔術工房)




明日こそ殺っ
明日こそ殺っ
綾香のメモ

玲瓏館外観

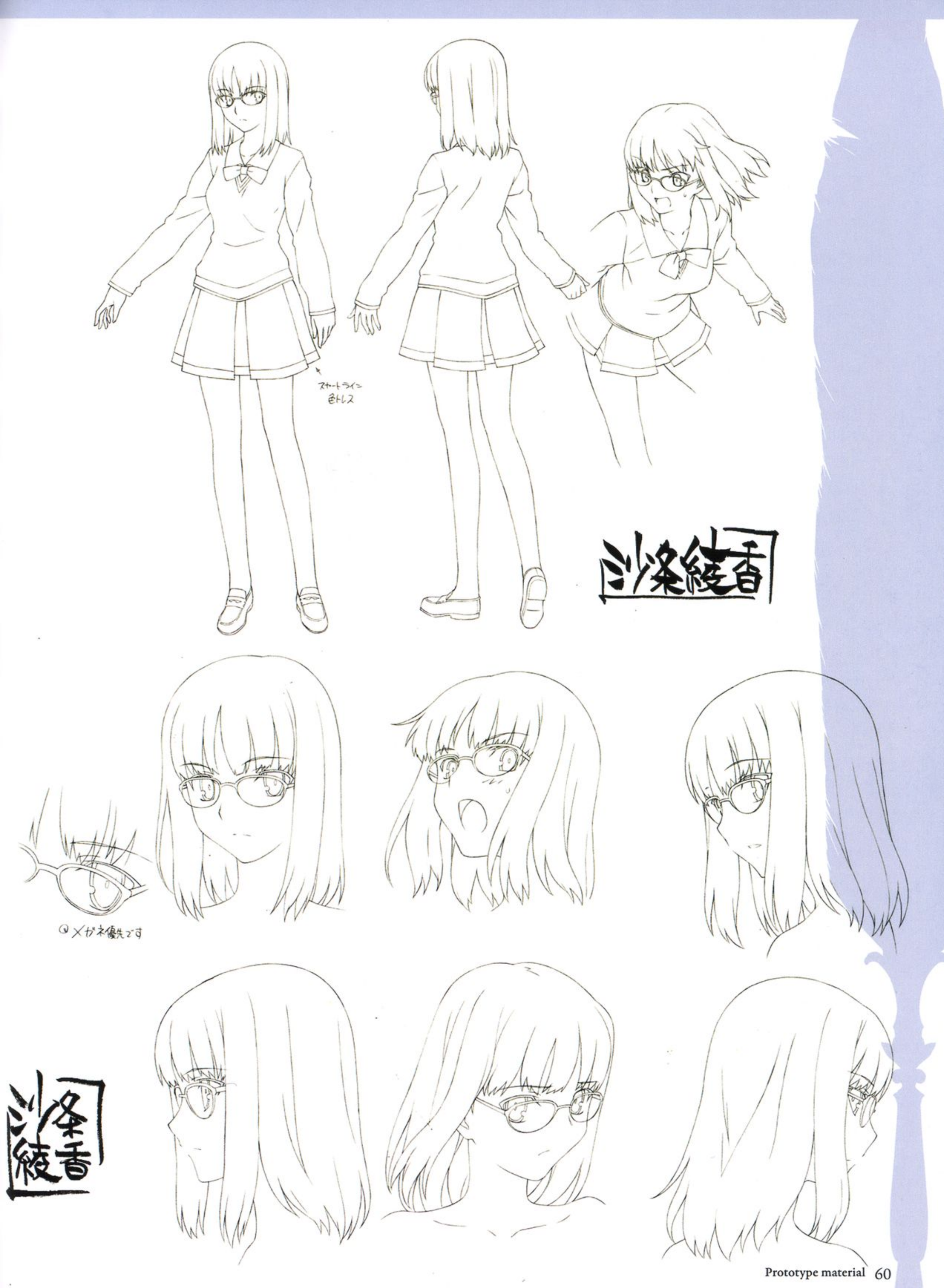
玲瓏館居間

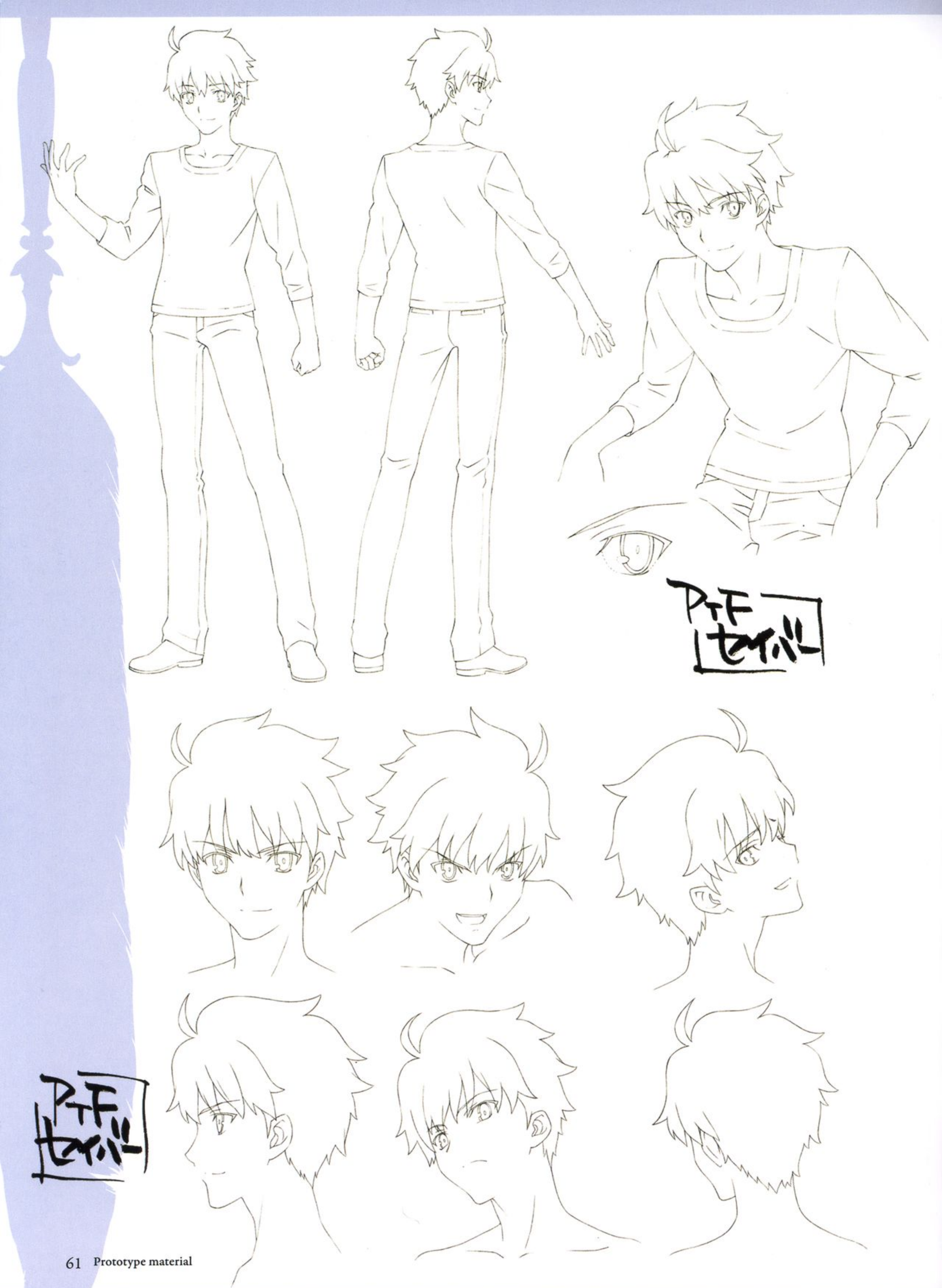


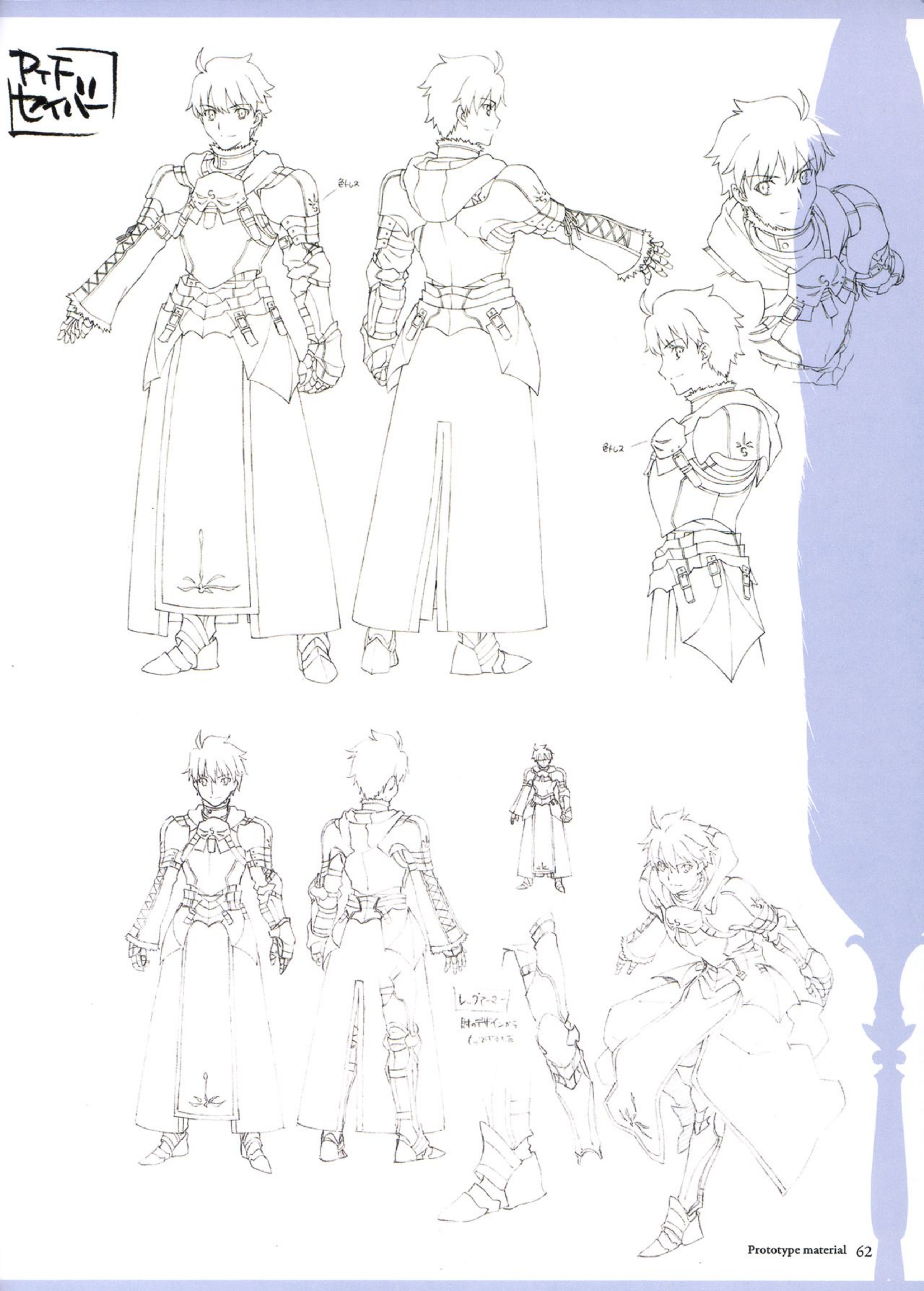
地下礼拝堂

ライダーのマスターの病室

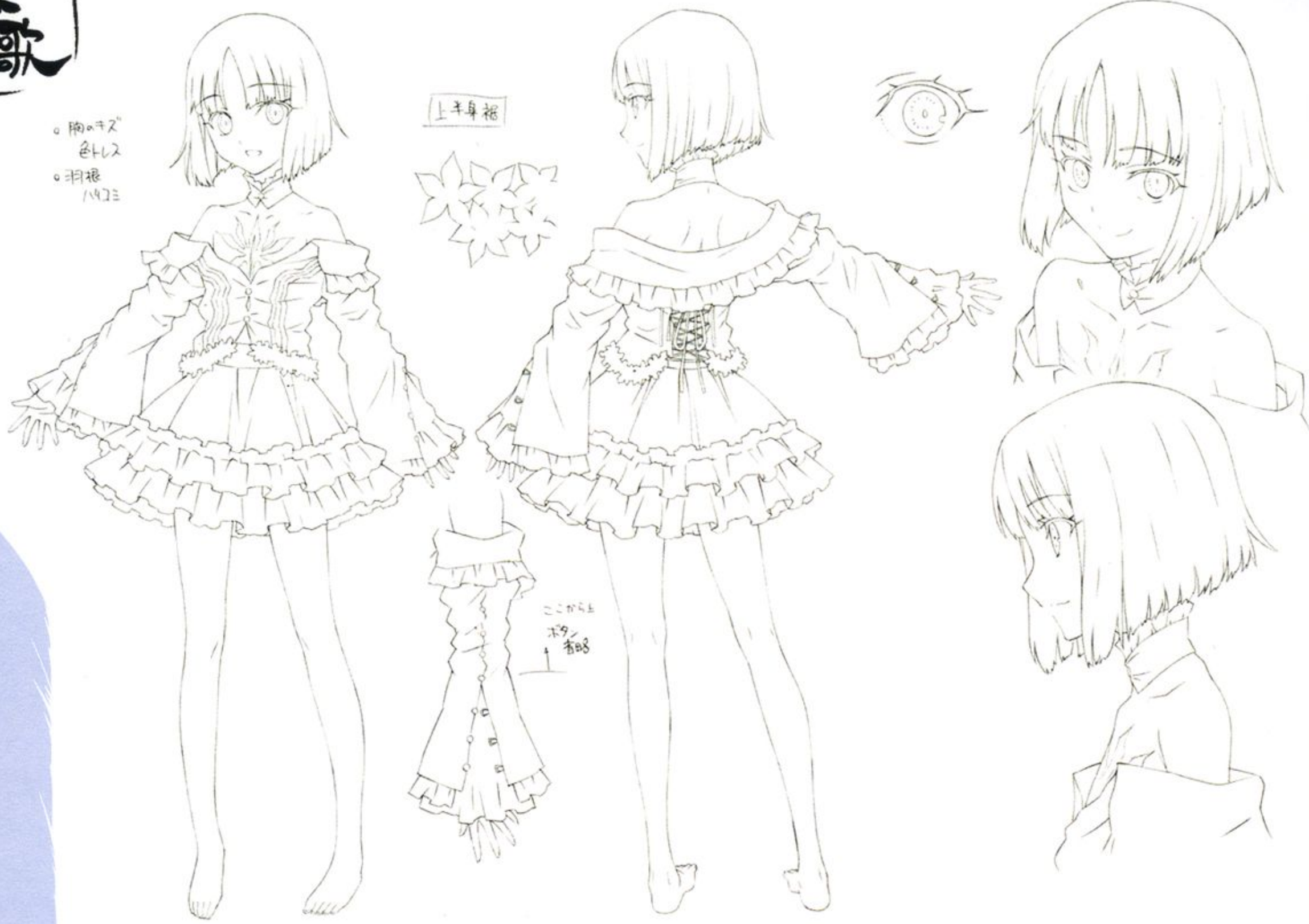
墓地


スカートライン
色トレス
沙条綾香
メガネ優先です
沙条綾香

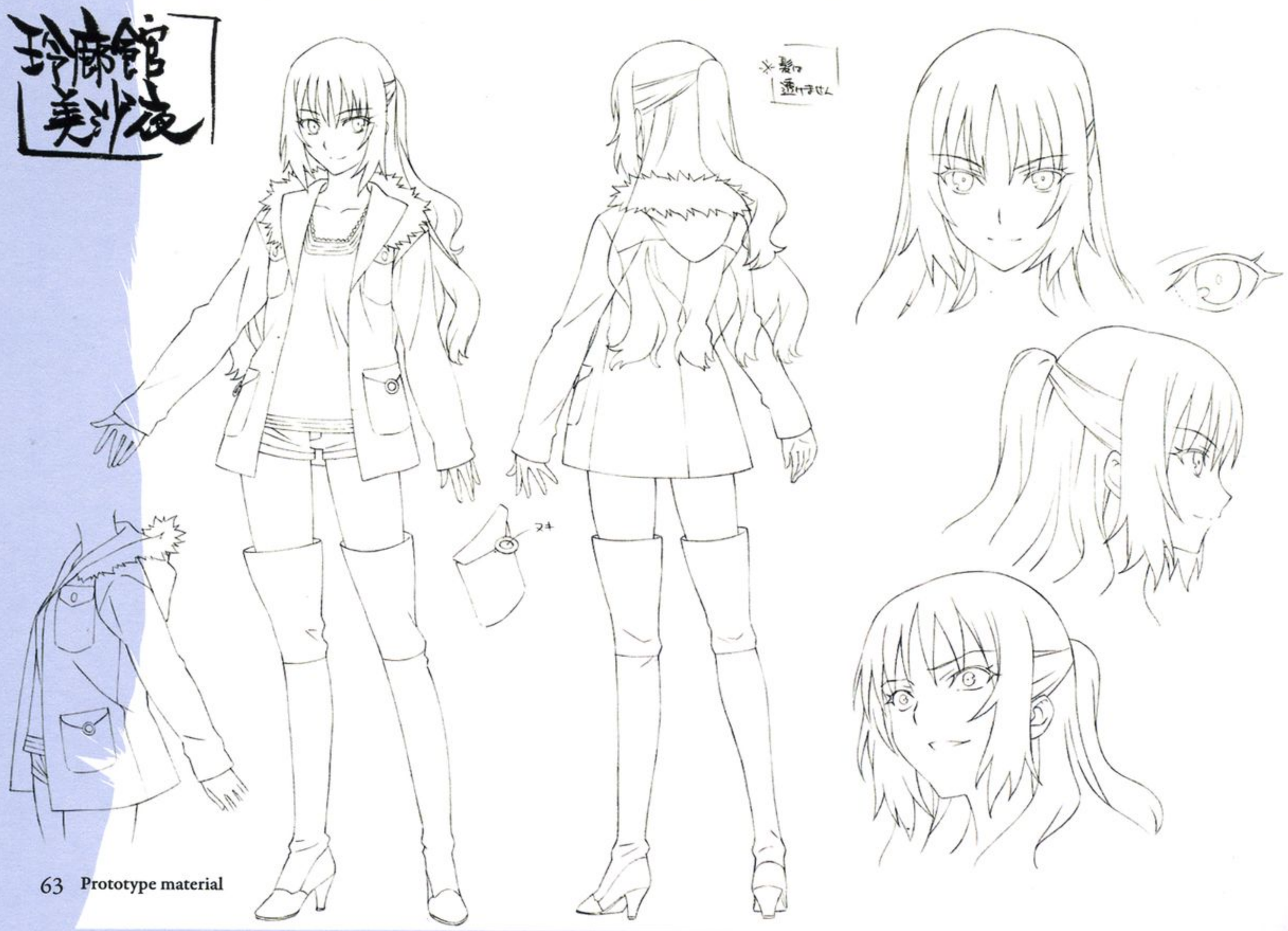


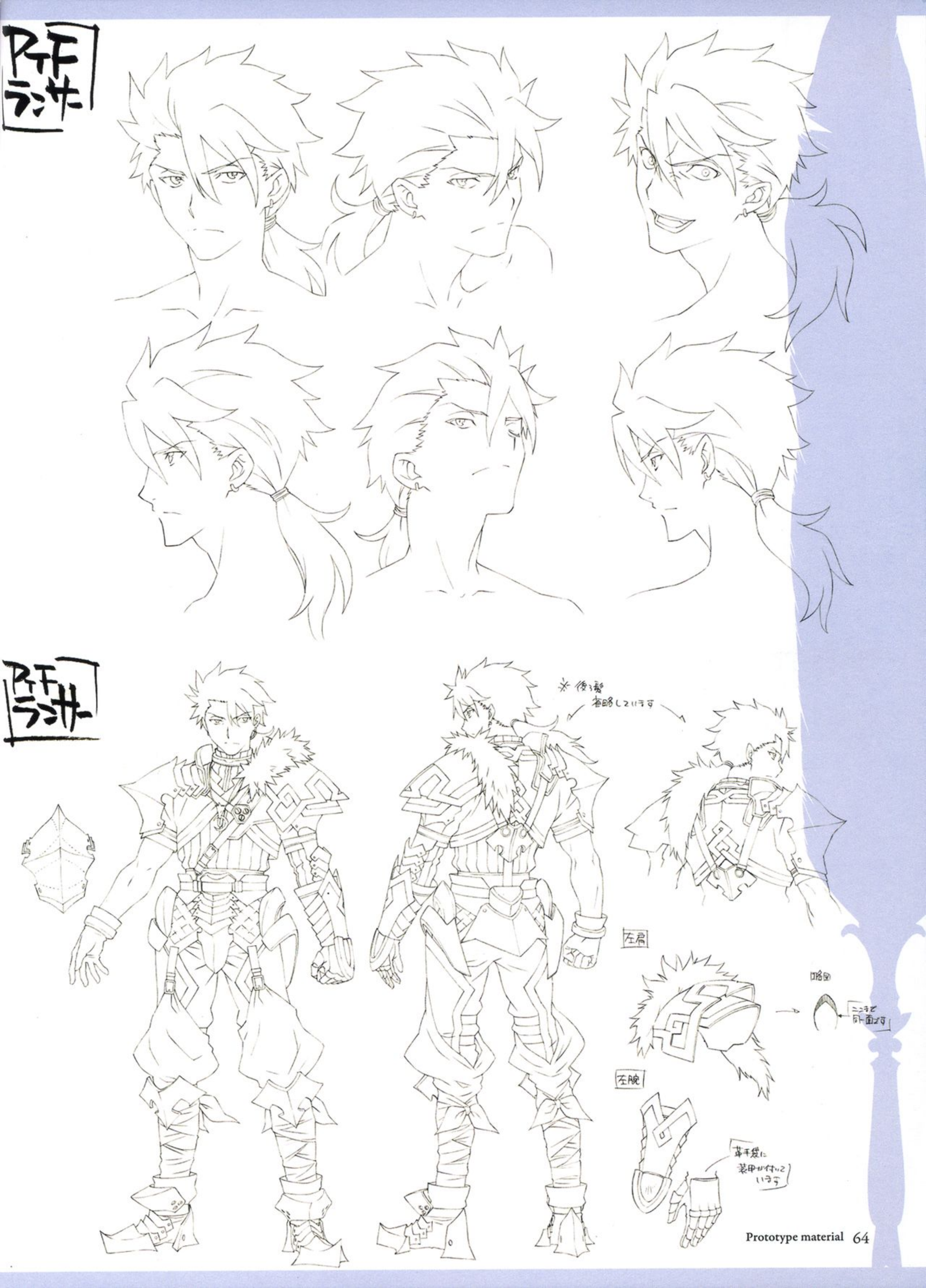

P+F
セイバー
色トレス
色トレス
レ.ブァーマー
肩のデザインから
ちょっとずらした

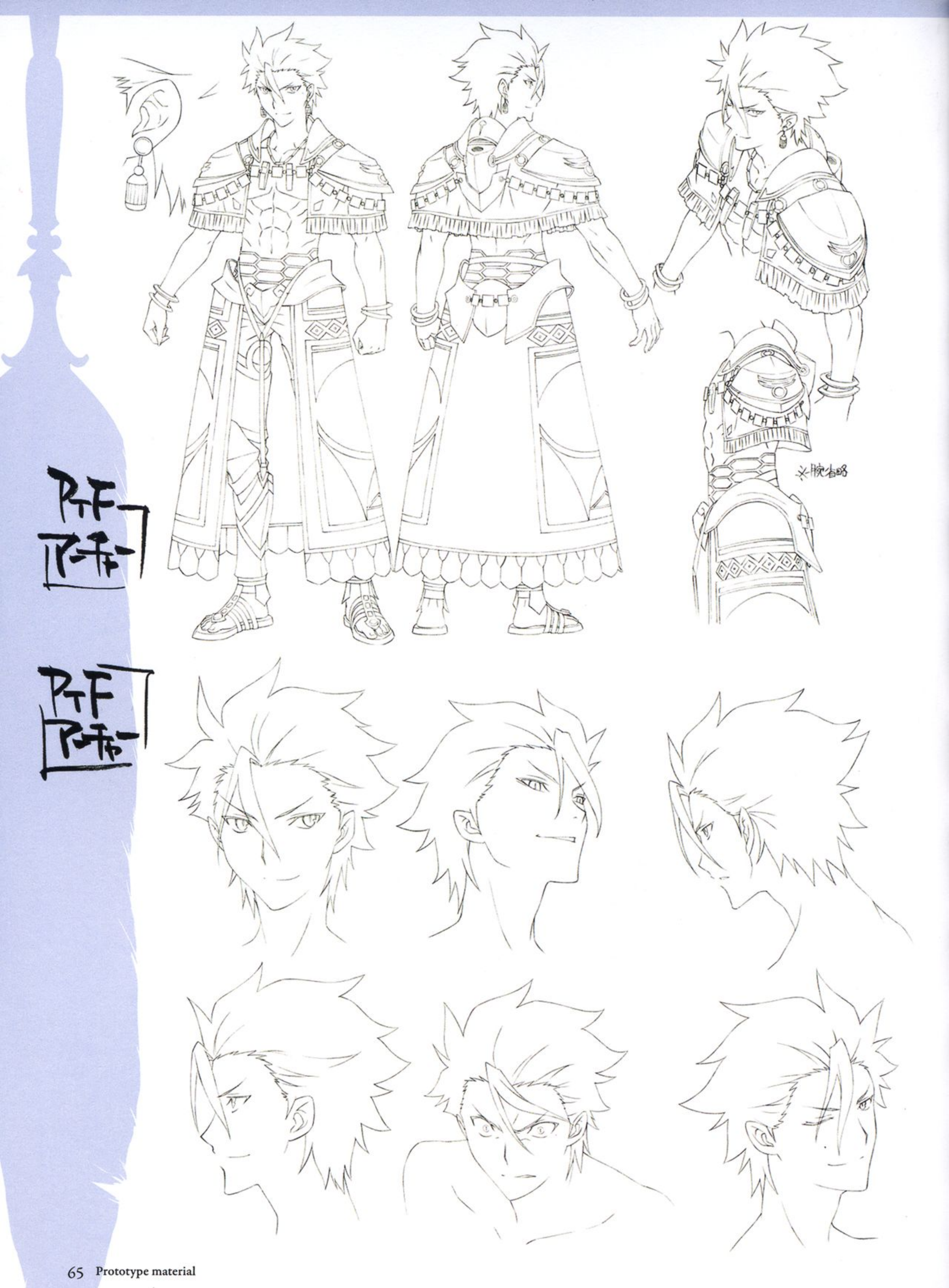
沙条愛歌



玲瑯館美沙夜




ラフ
ラフ
※後ろ髪
省略しています
左肩
略図
ここまで
同一面です
左腕
革手袋に
装甲が付いて
います


※腕省略

Prototype material

Postscript

武内崇

本作、Fate プロトタイプは、stay night 制作時から語ってきた、奈須きのこが高校の頃に書いた未完の伝奇小説であり、Fate の原典となる物語です。青年のセイバーと黒魔術を使う少女魔術師、マスターとサーヴァントの階梯という設定、主人公の友人として生活している敵サーヴァント、二重の封印が施されている聖剣…原典のみが持っていた沢山の魅力。stay night にする時にこぼれ落ちてしまった要素に対しての未練は年々大きくなり、何処かで形に出来れば…と考えていました。
色々な縁やタイミングに恵まれ、CP の映像特典としてそのプロトを制作することになった訳ですが、実に 20 年ぶりに触れたプロトはやはり面白かったです。奈須から断片的に教えて貰っていた「この先の展開」の真相は想像以上の衝撃であり、そして当時の自分達が好きだった全ての要素が詰まったアルバムのようだとも感じました。

特典映像と呼ぶにはカロリーの高いこの企画に、本気でつき合ってくれた岸監督と制作スタッフの皆様に、心からの感謝を。
そしてここから始まる新しい Fate の物語を期待された方にはゴメンナサイ。本作の完全版をゲームやアニメにする、ということは今の所まったく予定していません。作品の旨味に関しては、現状お見せ出来る全てを、映像とこの本に収録させて頂きました。
核心と断片が入り乱れている部分も含めて、ボンヤリと見えてきた Fate プロトの物語を楽しんで貰えれば幸いです。

奈須きのこ

まさかのプロト Fate でした。
もともとＣＰ三巻の最後には『TAKE MOON』とは違った、原作側から提示できるサプライズをつけよう、という予定だけがありました。
姫アルク VS セイバーリリィとか、月姫２のワンシーンを映像化するとか案はあがりましたが、最終的には
「プロトをシャレで映像化しよう。映画のトレーラーのノリで。美味しいところだけ詰めて、でもちゃんと物語が分かるように」
という、10 周年の締めくくりに相応しい“一度だけの原点回帰”に決定しました。

そんなワケで脚本化にあたり原作を読み返してみたのですが、これはこれで興味深い。原作の基本プロットにあったものは、八十年代の伝奇小説の王道とも言える「世界を革命する話」でした。
この物語を 2004 年に出すにあたり「個人を革命する話」に作り直した結果、基本ルールは同じでありながらまったく違う Fate が生まれた訳ですね。聖杯成就の目的がまったく違うモノである事が、時代の流行を表していて面白いです。

自分にとって原液ではあるものの、もう遠い場所に置いてきてしまった「青年主人公がひたすら恰好いい」ストーリーライン。それがこの FPT なのだと思います。

Colophon

編集・デザイン：WINFANWORKS
発行日：2011年12月31日

TYPE-MOON

TYPE-MOON